とある重力の星殺し《スタースレイヤー》

白眉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある重力の星殺し《スタースレイヤー》

【Ｎコード】
Ｎ７８７５Ｑ

【作者名】
白眉

【あらすじ】
無能力者、上条当麻。

そしてその友人たる無能力者、鷹嵜レイン。

青年は異能を殺し、青年は異能を隠す――

二人の青年の、ちょっとしたお話。

壱話目（前書き）

マンが買って読んでたら書きたくなったので書きました。

相変わらず無謀です。でもって調子に乗ってます。

しかも大まかな地盤がマンガとウィキ頼りです。

お粗末になる事請け合いですがそれでも生温かく見守っていただけると幸いです。

では、どうぞ～

壱話目

七月十九日――――

「みなさん。明日からお楽しみの夏休みなのですよ～」

教壇に立ってそう説明するのは、およそ教師どころか大人にすら見えない小柄な女。

1年7組担当　月詠　小萌――――

「学園都市から出る人はちゃんと申請書を提出してくださいね。お家に帰省する人もちょっとお出かけする人もですよ？」

発する声も子供のそれに近くどこか舌足らずに聞こえる。2つ隣に座る関西弁なんかはこの声に対してハァハァと荒い息遣い。ハッキリ言わなくても気色悪い。

「それから念のため――――外での“能力”の行使は絶対禁止なのですよ！！」

この言葉を皮切りに、いよいよ学生生活の大イベント、夏休みが開始された――――

「当麻」

俺は廊下を出て、前方を歩いていた男に声をかける。

「おう、レイか」

男――上条当麻は振り返って返事をした。

俺は当麻の横に並んで一緒に歩き出す。

「いや～、ようやく夏休みだな。明日から何すっかな～」

楽しそうに、でもって呑気そうに当麻は語る。

「いや、お前の場合は・・・」

「あ、小萌センセー。さよーならー」

俺の言葉を遮って、当麻は見かけた月詠に挨拶をする。

「はーい、上条ちゃん」

「また明日」

フリーズ。

満面の笑みでそう返した月詠の返答に当麻が一瞬固まる。

「え・・・？えええぇ～～～～～～！！？今なんと！？」

「んもーー、聞いてなかったんですか？明日からの指定者補習。このままじゃ留年決定かもですよ――っ。特に、“記録術（かいはつ）”の単位が。」

オールレッドです、と月詠が付け足すと、当麻は心底うんざりしたように溜息をつく。

ここらで補足説明。

記録術（かいはつ）と言うのは、俺達が住む学園都市特有の時間割の一つだ。東京西部の未開拓地を切り開いて作ったこの都市の至上目的と言ってもいい。

表向きは記録術や暗記術なんて言ってるが、その実は薬とか電気流したりして人為的に“超能力者”を作るっつうぶっ飛んだ話だ。

個人によって発現する能力にはバラつきがあるが、一通りこなせば大概はスプーン曲げ位はできると言うからふざけた話である。

要するに、学園都市は“一大能力開発機関”でもある訳だ。

「ちなみに、鷹嵜ちゃんも補習者リストに入ってますからね？」

「あ？ちょっと待てちびっ子。俺は別に赤点なんてねーだろうが」

「またセンセーの事をそういうふうに言って！鷹嵜ちゃんは口が悪過ぎます！それに！確かに鷹嵜ちゃんは成績優秀ですが、出席日数が壊滅的です！！」

頬を膨らませて言う月詠。

「別に俺が何しようーがカンケーねーだろ」

面倒くさく、やや適当に返す。

ちなみに、俺の場合は一日バックれるか午後からいなくなるかのどっちかが多い。今日みたくしっかりと終わりまで顔を出したのは珍しい方だ（終業式だったので珍しいもクソも無いとは思うが・・・）。

「うぅ・・・上条ちゃんからも何とか言ってください！！」

涙目で当麻を頼る月詠。生徒任せにする教師っつうのもどうなんだ？

「まぁまぁレイ。あんまし小萌センセーをいじめてやんなよ。それに、俺もレイがいてくれた方が色々助かるし。な？」

両手を合わせて当麻が懇願する。別にいじめてた訳じゃ・・・つか、後半お前の願望じゃねーか！

「・・・はぁ。明日から一週間だったな？」

「！来てくれるんですね！？」

「いかねぇと当麻が干からびそうだしな・・・別にあんたの為じゃねぇ」

「やっぱレイってツンデレだよな」

「殴るぞ！！」

ったく・・・まぁ、結局はこいつの言う事を聞く俺が、甘いって訳か・・・。

～～～～～～～～～～～

「はぁぁぁ～～～～～・・・・・・・・」

所変わって学園都市の街並み。とりあえずぶらついてる俺達二人だが、隣で当麻が低血圧な溜息を吐く。と言うかよくそこまで息が続くな・・・。

「また目隠しポーカーとかスプーン曲げとかやらされんのか～・・・出来るまで。ふこーーーーだーーーー・・・・」

「別にそんな気ぃ落とす事でもねーだろ？」

「お前は良いよ、できるから。俺なんて一回も成功したためしねぇし・・・どうせ俺は無能力者（レベル0）だよ」

「俺だって特筆するようなもん持ってねぇんだから、お互い様だろうが。しっかりしろよ」

「あぁ～～～・・・ふこーーだーーー・・・・」

「カビ生えるぞ・・・」

当麻の周りから負のオーラが溢れ出ている。この湿っぽさ加減はある意味能力かもしれない・・・。

と、ふと当麻が急に立ち止まる。目線の先にはファミレスの店先に出してある“新メニュー”の看板。

「・・・・丁度いいし、飯にするか。一品くらいなら奢ってやる」

「マジで!?さっすがレイ!お前のそういうとこ大好きだ!結婚してくれ!!」

「うぜぇ」

犬ころみたいに目を光らせる当麻をあしらってファミレスに入る。

「――まっ、丸々一学期分のサボりが一週間でチャラになるなら、安いもんだよな!」

「前向きだなお前は・・・・」

あるいは能天気とも。

「っしゃーーーー!せっかくの夏休みだ!!景気づけにブワーーッとムダ食いでも」

ブワーーーーッ

丁度当麻の言葉と重なるように、ウェイトレスが持ってきた飲み物が当麻の頭に降り注ぐ。

ずぶ濡れになる当麻。頭を下げるウェイトレス。当麻のウニ頭に消えていく紅茶とコーヒー。

この場合紅茶とコーヒーがホットじゃ無かったのはある意味不幸中の幸いか・・?

「よぉ、ねーちゃん一人ぃ〜〜〜〜？」

「聞いてんのかオラ！！」

当麻がもらったタオルで顔を拭いていると、聞こえてきたのは野太い声。

目をやれば、そこには中学生らしき女学生と、それに絡む見た目明らかな不良が複数。

女生徒の方は不良どもに対し無視を決め込んでいるらしく、それが不良の神経をより一層逆撫でしている。

「あれは確か、常盤台の・・・」

ガタッ

ふと呟くと、当麻が不良たちの方を見ながら席を立つ。

「！おいっ当麻！！」

「あんなの見てほっとけるかよ！！」

そう言うや否や、当麻は不良たちが絡んでる女生徒の席へと向かってしまった。

「っ、バカがっ・・・！！」

そこから先は、当麻が不良どもに難癖をつけて、不良どもが当麻を追い掛け始めて、俺はファミレスの代金を払ってから当麻達を追い掛けて。

ちょっとした逃走劇が展開されるが、まぁ特に話す事も無いのでここいらの話は省くことにする。

こんな感じに、バカでお人好しな無能力者の友人、上条当麻と。

同じく、バカでお人好しな無能力者のこの俺、鷹嵜レインの物語は、何の脈絡も無く始まってたりした。

弐話目（前書き）

御坂の口調とか当麻のキャラとか全然だわ・・・。

でもってオリキャラ視点がまだ続く

弐話目

「おらぁぁぁああ！！待てやクソガキャァァアア！！」

「ぶっ殺したらぁぁぁああ！！」

学園都市の橋の上。殺気満々の不良どもから逃げる当麻。でもってそれを追いかける俺。

かれこれ小一時間は走りっぱなしだ。さすがに疲れる。

「ちくしょー！何やってんだ俺は！？人助けなんて余計な真似しなきゃ良かったぜ！！」

自業自得だ。諦めろ。

「つかいーかげんしつけーんだよ！！とっとと倒れやがれってんだ！！」

「やかましい！！女の前でカッコつけやがって！！この逃げ足大王が！！！」

先頭を走ってたツルッパゲがゼェゼェ息を切らしながら叫ぶ。逃げ足大王・・・言い得て妙だな。

ただこの場合、当麻は別にかっこつけたいがために不良に難癖をつけた訳じゃない。

ボンッ

突如、前方にて爆発音。何か破裂したらしく、直撃をくらったツルッパゲは痛みに悶絶している。

「おい、今の・・」

「発電能力か・・？」

「レベル高そうだぞ・・・」

「やばくねぇか・・？」

いきなり仲間が怪我をこうむり、他の不良どもは当麻が何かしたのかとうろたえる。無論、無能力者の当麻には発電能力なんて芸当はできない。

「くそっ！覚えてやがれ！！」

頭から煙を上げて気絶しているツルッパゲを抱えて、不良どもは雑魚キャラのごとき捨て台詞と共に退散していった。

「うわぁぁ～・・・・」

一連の流れから、当麻は目頭を押さえる。確かに今のあいつにとっては頭が痛いだろう。

俺の方からも見えたが、爆発の一瞬前に後方から電撃が走ってい

た。発生源は恐らく――――

「ったく、何やってんだか」

俺や当麻の後方。聞こえたのは女の声。

振り返った先にいたのは、先程不良に絡まれていた常盤台の女生徒。

「この私からあんな不良を庇ったりして、善人気取り？」

女生徒――御坂美琴は、そう言って当麻に喰ってかかる。

対する当麻は至極めんどくさそうに溜息を吐く。

「何なのよそのタメ息は！！」

案の定、御坂は当麻の行動に腹を立てる。

「ったく・・・あんたもバカにしてるわね」

当麻の顔を覗き込むように御坂は喋る。

「私を誰だと思ってるわけ？学園都市でも7人しかいない“超能力者（レベル5）”なのよ？」

そう――――御坂美琴は、この学園都市内でもたった7人しかいない最高ランク、超能力者（レベル5）なのだ。

能力は電撃操作。名を“超電磁砲（レールガン）”。

何故、女子中学生にこんな物騒極まりない名前がついてるのかと

言えば、それは彼女が扱うある得意技に由来する。

「・・・つーかさ。俺はスプーンの一本も曲げられない正真正銘の“無（ゼロ）”能力者だぞ？それを事あるごとにムカつくだのボコボコにするだの――何なんだお前は？」

不満げにブー垂れる当麻。まぁその疑問も最もだろう。

「ゼロ、ねぇ・・・ね？“超電磁砲（レールガン）”って知ってる？」

「あん？」

「金属の砲弾を音速の数倍とかの超高速で打ち出す兵器だな」

「へぇ・・・」

説明を挟んでみたが当麻はいまいち理解しかねてるらしい。返答が生返事だ。

対する御坂は少しだけ感心するようにこちらに興味の視線を向けてきた。

「そうそれ。本来は電源とかの関係で結構大型になるらしいんだけどさ」

言いながら、御坂はカバンの中をまさぐる。

そこから取り出したのは、ゲーセンのメダルコーナーとかにあるコインが一枚。

「――――こういうのを言うらしいのよね」

ピンッ

親指に弾き上げられたコインが回転しながら宙を舞う。
直後、空中のコインが急に電気を帯びる。
落下と共にその強さは増し、丁度御坂の手の前まで落ちてきた瞬間、閃光が最高地点に達する。

瞬間、コインは文字通りの砲弾となって、衝撃波を伴いながら光の軌跡を描く。
後に残ったのはコイン(砲弾)が通った痕。数十m先まで続く、深く抉られたコンクリートの道が、その破壊力を物語る。

これこそ、御坂が“超電磁砲(レールガン)”と言われる由縁である。まさに歩く人間兵器。人に向けて撃てば体が木端微塵だ。
もっとも、それは一人の例外を除いてだが。

見れば、当麻はこの惨状を目の当たりにして顔面蒼白だった。まぁ、普通はこういう反応だろう。
そんな当麻に向け、御坂が雷撃を放つ。雷とみまごうばかりの閃光が、容赦なく当麻を飲み込む。
立ち込める煙。先の光景を見れば、誰もが当麻が無事であるはずがないと思うだろう。

「あれだけの電撃喰らって――――なんであんたは無傷なのかしら？」

しかし、晴れた先に立っていた当麻には傷一つなかった。
当麻は、右手を前にして、腕を交差させるように防御の態勢を取っていた。皮膚どころか、来ている衣服には焦げ目さえ付いていな

い。

――それが異能の能力ならば、神様の奇跡だろうが問答無用で打ち消す能力。

――幻想殺し（イマジンブレイカー）――

当麻が電撃を防げた理由はこれにある。

「まったく・・・そんな能力、学園都市の書庫（バンク）にも載って無いんだけど」

どこが無能力よ、と御坂は忌々しそうに言う。

確かに、超能力者（レベル5）が３２万分の１の天才だと言うなら、当麻の幻想殺し（イマジンブレイカー）は２３０万分の１の天災と言えるだろう。

「あたしは！自分より強い存在がいるのが許せないの！！」

「結局ソレかよ！！」

再び放たれる電撃。今度は今範囲に広がり、当麻に襲いかかる。

「ひぃぃぃぃぃ～～！！」

悲鳴を上げながら、当麻は必死に電撃から逃れようとする。

「てかレイ！！さっきから傍観してないでお前も止めてくれ！！」

「無理」

「即答！！？」

この薄情者～～！！、と言いながらちょこまかと器用に雷撃を避ける当麻。

ぶっちゃけ右手で全部防げばいいと思うが、そう簡単にも行かないだろう。

当麻が持つ幻想殺しの効果範囲は「右手首から上」だけ。

当然そこ以外に当たれば痺れるだろうし、あんな威力の電撃まともに食らえば即死だ。

そんなもんが自分に向かって飛んでくるんだから結構怖いと思う。

そりゃ逃げたくもなるわ。

「・・ったくしょうがねぇ・・・」

呆れながら、俺は電撃を放ち続ける御坂の、かざされた手首を掴む。

「おい、その辺でやめとけ」

「何よ、邪魔する気？」

途中で邪魔されて、御坂はかなり気が立っている。

思えばこの時、どうやって止めるかをまともに考えてなかったのが不味かったんだろう。

「なんべんやっても、お前の力じゃ当麻には勝てない。諦めろ」

「！？」

「ちょ！？おまっ――――」

「ふざけんなーーーーっ！！！」

その日、学園都市で一部停電が起きたらしいが、丁度その時に、“橋の上から登る雷”が目撃されたとか。

――翌日――

「あぁぁ・・・くそっ。あちぃ・・・」

蒸し暑さから目が覚める。現在時刻は7時半。昨日からの気だる

さを引きずる体を、伸びをしながら解す。

昨日はあのくそ女のせいで散々だった（髪が少し焦げた・・・）。

奴が放った電撃により、橋から一定範囲内では停電が起きた。俺が生活しているこの学生寮もその例外ではなく、悲しくもエアコンが壊れるという、この猛暑には死刑宣告に等しい状況に陥ってる訳だが。

幸いなのは、偶然有った予備バッテリーのおかげで、冷蔵庫の中の食材はみな生き残ったと言う所である。

「当麻は・・・・ダメだろうな・・・」

自称不幸体質のあいつが予備バッテリーなんて都合の良いものを持ってるとは思えない。

「とりあえず起こしに行くか・・・」

蒸し暑さに苛まれながら、俺はちゃっちゃか制服に着替えて部屋を出る。当麻の部屋は俺と同じこの学生寮の7階。と言うかお隣さんだ。

あいつと俺との縁はこういう平凡な所が切っ掛けだったりする。

色々考えてる間に当麻の部屋の前に立つ。

「お～い、当麻～・・・・」

チャイムも鳴らすが一向に出てくる気配は無し。

「ったく・・・おい！っとっとと起きろ！補習行くんだろうが！！」

音を立てれば起きるだろうとドアに手をかける。

するとどうだ。ドアが内側に開きやがった。

「掛け忘れか？・・・・ったく抜けてやがんな・・・・」

呆れつつドアを押し開け、中に入る。

「当麻～？起きてんのか～・・・って臭っ！？」

何か奥から酸っぱい臭いがする。どうにも俺の予感は的中したらしい。

その当の本人も、どうやら奥に居るようだが・・・？

「当麻？何やって――――」

ベランダにいたらしい当麻の姿を発見し、近づき、俺は言葉を失った。

ベランダにいたのは、明らかに状況を飲み込めていない表情をした当麻と。

あたかも干された布団の如くベランダの手すりに引っ掛かっている、白い修道服のガキだった。

参話目（前書き）

最近ゲームにうつつをぬかしてばかりで、すっかり執筆が滞っています・・・。おまけにキャラの崩壊っぷりは相変わらず。

では、第3話。

どうぞ～

参話目

「おなかへった」

・・・・・・

「おなかへった」

・・・まぁ、あれだ。

「おなかへったおなかへったおなかへった」

今どういう状況なのかを説明すると、だ。

「おなかへった、て言ってるんだよ？」

目の前で修道服のガキが転がりながら空腹を訴えている。

・・・・・何なんだこの状況？

「だってよ当麻」

「え？俺？俺に振るの！？」

「だってここお前の部屋だし・・・」

そう。俺がいるのは自分の部屋、ではなく、その隣の当麻の部屋。寝ているであろう当麻を起こしに部屋を訪ねてみれば、どういうわけかこんな状況に陥ったのだ。

「とりあえずだ。当麻、一つだけ忠告してやる」

「な、何だよ・・？」

何時になく真剣なカオ（のつもり）の俺に、当麻は少し緊張し、息を飲む。

「自首は早めにな？」

「ちっげぇぇぇぇぇえ！！」

俺なりの最良のアドバイスに、当麻は絶叫する。至近距離で聞いてた俺はもちろん、修道服もいきなり叫ぶもんだからかなりビビっている。

「チゲ？何？お前も腹減ってんの？」

「違うっつーに！！てか自首ってなんだよ！？別に俺は警察のお世話になる様な事はこれっぽっちもしてねーよ！！」

「朝っぱらから五月蠅いぞ、当麻」

「お前の所為だろうが！！」

ズビシィ！、と擬音が付きそうな勢いで、当麻は俺を指さす。

つってもなぁ・・・・朝起きたら修道服着たガキがベランダに干してあったとか、普通は信じないと思うが。

考えたくはないが、当麻が何か良くない事をした結果とかのほうがよっぽど説得力がある。

「おなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな！！」

悩みの種たるこのガキは今だ飯の催促をしてくる。大概呑気だなこいつも・・・。

（で？どうする気だ当麻？）

（俺に聞かれてもなぁ・・・。できれば俺も関わりたくないし）

アイコンタクトによる会話。確かに、関わればほぼ１００％厄介事に巻き込まれることになるだろう。

ふと、後方にいるガキに目を戻す。もの欲しそうな視線、指を咥えてある一点を見つめている。

視線の先に有ったのは、当麻の足元にてプレスされていた焼きそばパンが。

恐らく傷んでいるのであろう、ちょっと酸っぱい匂いがした。鼻

の奥にツーンとくる。
当麻はそれを、少し顔から離しながら持ち上げる。
「・・・これか？食う気か？・・・よし！！たぁーんと喰え！ムサボリ喰え！！」
（当麻お前・・・いくらなんでもそれは・・・）
（ふっふっふ・・・さすがにこの酸っぱい匂いを嗅げば裸足で逃げ出すだろ！？）
当麻はどうやら本気で関わりたくないらしい。目にカエレとか書いてある。
が、次にこの修道服のガキが取った行動は、俺達の期待を裏切った。
「ありがとう！！君いい人だね？」
「え！？いや、あの・・・」
傷みかけのパンを差し出されているにもかかわらず、ガキは満面の笑みでそう返す。
予想外の反応に当麻がうろたえる。
「いただきまーす！！」
「ちょっ・・・」

ガプッ

喰らい付いた。それも一口で。しかも当麻の手ごと。

ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・

木霊する当麻の悲鳴。どうでもいいがまだ早朝だぞ？当麻。

あれから俺と当麻はとりあえずこのガキに手当たりしだいの食い物を与えた。

コンビニ弁当やら缶詰やら漬物やら。手当たりしだいに喰い尽くす様はさながらブラックホールみて―だった。俺の部屋の冷蔵庫の3分の1まで消費されたのはかなり痛い・・・・。

とりあえず閑話休題。

まずは菓子袋に手を突っ込んでるこいつの正体をハッキリさせなければならんだろう。

「・・・・で？お前は一体何なわけ？」

「む・・・私はお前なんて名前じゃないよ？“インデックス”って言う名前があるんだから」

目次（インデックス）？

「見ての通り教会の者なんだね！！」

「いや明らかに偽名だろーが！！」

「あ、バチカンのじゃなくてイギリス清教の方だね！！」

「聞いてねーよ！！」

おちょくってんのかこのガキ・・・・。

（なあ、レイ。なんか変じゃないか？）

（あ？何がだよ？）

（だって、どう見ても学園都市（このまち）の人間じゃないし・・・こんな子供が都市の警備を掻い潜ってこられると思うか？）

確かに、当麻の疑問ももっともだ。育脳（かいはつ）なんてやってるから当然なんだが、この学園都市の警備っつーのは見た目以上に厳重だ。

人の出入りは門（ゲート）で完全に走査されるし、空の上には工業大学が打ち上げた監視衛星まである。

記録と一致しない人間が都市内に入ったとなれば、警備員（アンチスキル）や風紀（ジャッジメント）

委員がすぐに駆け付ける筈だ。

（大方、昨日の停電で、ゲートが機能しなかったってオチだろ？）

まったく・・・あの女も随分な事をしたもんだ。

（焚き付けたのはお前だからな？）

うるせぇよ当麻。

「で？何だってお前はベランダに干してあったんだ？」

「・・・・」

途端に俯いて黙り込むガキ――インデックス。

「だんまりか？」

「レイ、あんま詰めよんなって・・・」

「干してあったんじゃなくて・・・落ちたんだよ？」

「落ちたぁ？」

仮にもここは7階だぞ？それよりも上から落ちるとか、どういうシチュエーションだ？

「追い詰められて――――隣の屋上へ飛び移ろうとした時、背中を撃たれてね」

・・・こりゃいよいよキナ臭くなってきたな・・。

“何者”かに追われる修道服の子供。

撃たれたと言って指した背中には、血の痕はおろか、穴一つ無い。

俺も大概当麻が首突っ込んだ厄介事に巻き込まれた方だが、ここまでのスケールのでかさは稀だな・・・。

隣からは、緊張からだろう、当麻の息を飲む音。

「私は『禁書目録(インデックス)』だから・・・私の持ってる１０万３０００冊の魔導書。それが連中の狙いだと思う・・・」

言葉を紡ぐインデックス。恐らくこれ以上聞けば、多少なりとも引き返せなくなる。

「連中って・・？」

それでも、当麻はインデックスに問うた。単純な好奇心(きょうみ)からか、あるいはこいつの性質(おひとよし)からか。

「魔術結社(マジックキャバル)だよ」

・・・・・・・・・・。

「魔術ね・・・。はぁ・・・」

「はぁあああ～～～～！？」

絶叫その二。

「真横で叫ぶな当麻。耳が痛い」

「あぁ、わりぃ・・・でもよ、レイ」

「だな。さすがに“魔術”となるとどうしようもないな」

俺達にとっては至極当然の結果。

インデックスは、そんな俺達を見て、少しだけ驚いたような、落胆したような。そんな、よく解らない表情（カオ）になる。

「“世の中不思議なことなんて何もない！！”――――とまでは言わないけどさ・・・」

「まぁ、発火能力（パイロキネシス）とか透視能力（クレアボイアンス）とかの「異能の力」があるくらいだしな」

「・・・頭ごなしに否定するってわけでもないんだね」

それはそうだ。この学園都市では超能力なんてものがある。

人間の脳など結局は電気信号の発信源にすぎない。そこに少し細

工を施すだけで簡単に「開発」できてしまう様なシンプルなものだ。
しかも、その全ては科学的根拠に基づいて証明できるものだけだ。
人は、理屈が無ければ事実(リアル)を受け入れられない。たとえ魔術が存在すると言うのが真実だとしても、そこに理由や根拠がなければ信じない。
理屈が無ければ、妄想だと判別し、非現実だと否定し、拒絶する。
そうでなければ、MP消費して死人が生き返るなら、誰も「育脳(かいはつ)」なんて馬鹿馬鹿しくてやりもしないだろう。
だから、魔術は信用できない。その旨を俺と当麻はインデックスに伝える。
「・・・・でも、魔術はあるもん」
途端にインデックスは頬を膨らませる。
「魔術はあるもん！魔術はあるもん！あるもんあるもんあるも「が――――っ！！」」
「んなに言うんだったらなんかやってみやがれってんだ！！触れずにホウキ動かしたりとか！魔法の杖出すとか！！」
「わ、私は使えないもん。魔力が無いから・・・」
「はっ！無理なんじゃねぇかよ！ダサッ！！結局は口だけかぁ！？」
「お、おいレイ・・・・」

「う～～～～・・・・ふ、ふーんだ！！そっちこそ、超能力なんてエラソーにっ！君達だって何ができるって言うの？」

「あぁ！？」

「超能力は信じるのに、魔術は信じないなんて・・・へ――ん！！」

ブチッ

何かが切れる音がしたがまぁ気にしないでおこう・・・さぁ、握り拳に力を込めて、今万感の想いを込めて振り上げて――――

「！待てレイ！！さすがに子供相手にそれは不味ーい！！」

振り下ろそうとした瞬間に当麻に後ろから羽交い締めにされる。

「放せ当麻！！このガキいっぺんぶん殴る！！」

怒りに身を任せてぎゃいのぎゃいの言っていると、突然インデックスは台所へと姿を消す。

「何だ・・？」

「さ、さぁ・・・？」

数秒後。

「「！？」」

戻ってきたのは包丁を握りしめたインデックス。何だ！？ドメスティックか！？バイオレンスなのか！？

「ちょ、ちょっと待て！落ち着け！！」

「悪かった！俺達が悪かったから！！そんな危ないもん仕舞って！！」

途端に下手に出る俺と当麻。だっていきなり刃物持ちだされるとは思わないだろ？

「刺してみて」

・・・本日二度目のフリーズ。あれか？とうとう頭がおかしくなったのか？

「この修道服は「教会」としての必要最低限な要素だけ詰め込んだ「服の形をした教会」なの！！布地の降り方、糸の縫い方、刺繍の飾り方まで・・・全てが計算されてれるんだよ！！」

自信満々で言うインデックス。

・・・えぇっと・・・つまり何なんだ？

「布地はトリノの聖骸布をコピーしたものだから、強度は法王級なんだよ？銃で撃たれても、包丁で刺されてもへっちゃらだもん！！」

ほぉ・・・そんな便利なもんがあんのか。見た目完全にただの修

道服だけどな。

「だからほら！これで私のお腹をおもいっっきり刺してみる！！」

なるほどねぇ・・・だったらブッ刺しても平気か――――

「ってアホか！？んなことできる訳ねぇだろ！！」

「良いから！遠慮しないで！！」

こっちの言い分も聞かずにインデックスはぐいぐいと包丁を押しつけてくる。

「だからあぶねぇって！！・・・・あ」

押され押し返されを繰り返していた包丁はふとした拍子に俺達の手元を離れ宙を舞う。そしてそのまま・・・・

サクッ

「痛ぇぇぇぇぇーーーーーー！？」

当麻の足へと直滑降。

さすが不幸体質・・・・この手の災難を磁石みてぇに吸い寄せるな・・・・。

「大丈夫か？当麻」

「うぅ・・・サックリいってやがる・・・」

後で絆創膏でも貼っとけ。
・・・そう言えば。
「なぁお前、俺らに何が出来るかっつったよな？」
「？」
「こいつ――当麻の右腕な。“幻想殺し”っつって、それが異能の力なら超電磁砲だろーが神の奇跡だろーが打ち消せるっつーシロモンでな」
「そうか！俺の右手であいつの服に触れば・・・」
「そう。こいつの話が本当なら、右手で触れれば木端微塵にでもなるってわけだ」
「ふ～～～ん・・・・まぁ、彼の力が本っ当な・ら・ね？」
そう言ってインデックスは偉そうに鼻を鳴らす。
このガキ・・・・その態度も今の内だ！！
「行け！当麻！！」
「応よ！！喰らえっ！！」
勢いよく右手を振りかぶる当麻！！今その魔手がインデックスに迫る！！――――
ポスッ

・・・・・・シーン・・・・・・・

「「「・・・・・・」」」

「・・・何も・・・起きないな・・・」

「・・・や、やっぱり！幻想殺しなんて嘘っぱちなんだね！！」

「あぁ！？てめェの方こそなんも起きねだろーが！！この大ホラ吹きが！！」

「なにおー！？」

「なんだ！？」

「ちょっ！？落ち着けって二人とも――――」

バサッ

「え？」

「は？」

「ん？」

何やら布か何かが落ちた音。

気づけば、腰に手ぇ当ててふんぞり返ってた筈のインデックスの白い素肌が露わに――――まぁ要するに素っ裸になった訳だが。

場の空気が凍結したような感覚。

そんな中でも俺ら二人の視線はインデックスに集中しているわけで。

インデックスの目尻にじわじわと涙が溜まる。

次の瞬間、インデックスはその白い歯を剥き出しに襲いかかってきた！！そこで俺が取った行動は――――

「当麻ガード！！！」

「ちょ！？レイおまっ・・ってぎゃぁぁーーーー・・・・・」

早朝にして三度目の当麻の叫びが木霊した瞬間だった――――

「がっつり噛まれたな～・・・ったくひでぇことしやがる」
両腕の至る所に歯形をつけられた当麻を見て、そう呟く。
「いや酷いのはお前だからな？」
アーアーアー聞こえない聞こえない。
さて、猟奇的噛みつき少女の方はと言えば――――
「・・・・・」
落ち込んでる。そりゃもう谷よりも深く。
渡した安全ピンでばらばらになった修道服を繋ぎとめようとしてる姿を見ると、何かこっちまで哀しくなってくるな・・・・。
（それにしても・・・・）
木端微塵にはならなかったが、修道服がバラけた＝幻想殺（イコール）しが反応した。
それはつまり、インデックスの話す事が満更嘘じゃないことの証明になる。
（魔術だの魔導書だの・・・１から１０を信用する訳にもいかねーが・・・）
「うわっ！！レイ、時間時間！！」
「あん？」

慌てふためく当麻に促され、時計に視線を移す。見れば、既に時刻は8時半を回っていた。

「おぉ・・・大変だな」

「なんでそんな呑気!?」

「いや・・・だって俺バイクあるし」

「なぬー!?卑怯だぞレイ!自分だけ!!」

一体どう卑怯だっつうんだ?

「なぁレイ頼む!!俺も乗せてってくれ!!」

「やだね。お前も乗せると途中で事故りそうだし」

「そこを何とか!!頼む!!」

必死になって当麻は俺の脚にしがみつく。

「えぇいしつこい!!こんなことしてる暇あったらさっさと行け!!」

「畜生!レイの薄情者!人でなしー!!」

俺に冷たくあしらわれた当麻は、泣きながら（無論嘘泣き）部屋を出て行こうとする。

グギッ

「――――っ！！」

唐突に響く痛々しい音。どうやら慌てて駆け出した当麻が壁に小指をぶつけたらしい。

痛さの余り声も出さずに悶絶する当麻。打ち付けた足を抱えてピョンピョン飛び跳ねている。

「っととっ――――」

おもむろに当麻はバランスを崩し、そのまま体全体で床に向かってダイブする。

パキッ

「あ」

今度は何か固いものが割れる音。崩れ落ちる瞬間、俺が見たのは当麻の尻ポケットから落ちる携帯電話。つまりここから導き出される結果は――――

「あーーーっ！！」

・・・つまりはそう言う事だろう。

「うぅ・・・不幸だ・・・」

哀れ鉄屑(ガラクタ)と化したケータイを見て当麻はそう呟く。

「なんか彼、不幸って言うよりドジなだけかも？」

俺の横にいたインデックスは、少しだけ愉快そうに頬を緩めて言う。

「・・・まぁ、否定はしないな」

当麻の場合、あいつのそそっかしさとか要領の悪さも原因の一つだったりする。今だって片足で跳びはねたりするからだと俺は思う。

「・・・それじゃ、そろそろ行くね？」

「行くってどこに？」

「う～ん・・・とりあえずは近くの教会かな？」

そう言って、インデックスは玄関へと向かう。

「！おい！どこ行くんだ！？」

「出てくの。もたもたしてたら、いつ敵が来るか解んないしね。・・・・ご飯、ありがとね」

軽い。

“敵が来るか解らない”なんて、そんな事を軽々しく言ってのけるこいつの顔は、悲愴でも恐怖でもなく、笑っていた。

「待てって！お前、行く当てあんのかよ！？よく解んねーけど、追われてるんならウチで隠れてりゃ良いじゃねーか！！」

「ダメだよ・・“不幸”になるよ？」

引きとめられたインデックスは、一度当麻に向き直る。

「さっきはドジなだけなんて言ったけど、“幻想殺し（イマジンブレイカー）”なんてものが本当にあるなら、神様の御加護とか運命の赤い糸とか――――そう言った物も纏めて消してしまっていってるんだと思うよ？」

それってつまりは・・・・

「つまり、君の右手は、どんどん『幸運』の力を消していっちゃってるってこと」

「「！！！」」

ここにきて明かされた衝撃の真実。なるほどね・・・・それならここまでいろいろあるのも納得がいく。

当の当麻本人はと言えば、相当ショックらしく、何かものすごい顔をしていた。字面だと説明できない作者の表現力の無さが憎い――――

「・・・・マジっすか・・・・？」

へなへなと崩れ落ち、両手を床に付けて落ち込む当麻。
ふと、当麻は自分右手を見る。その手のひらには、誰かが吐き捨てたのであろうガムが張り付いていた。
「・・・・どうやら本当らしいな、当麻」
「ね？立ってるだけでそれだもん。私と関わったらなおさら――――」
「いや！！それとこれとは関係ない！！」
落ち込んでたはずの当麻の語調が、不意に強まる。
「危ない目に会うって解ってて！お前を外になんて放り出せねーだろうが！！」
「・・・・」
「当麻・・・・」
まったく、相変わらずのお人好しだ。
でも、そんなこいつだからこそ、俺は好ましいと思う。
「じゃあ」

「私と一緒に、地獄の底まで付いてきてくれる？」

その後、インデックスはどこかへと向かった。あいつの言った通りなら、教会を目指していったんだろう。
その時のあいつの表情は、少しだけ悲しそうで。
それは、即答できずに言葉を失った俺達への失望か。或いは、今までも経験してきたからという、諦めからか。

何にせよ、インデックスはどこかへと消えて行った。
ただ俺は、あんな子供が、“地獄の底まで付いてきてくれるか”などと言った事に。

“地獄”なんて言葉を使いたくなるような状況に、あいつはいるのかと言う事に、戦慄を覚えた。

余談だが、俺達二人が補習に遅刻した事を、ここに伝えておく。

参話目（後書き）

はい。と言う訳で第3話。

いかがだったでしょうか？

・・・と言うかあれですね。私にギャグのセンスとかは1ミリも無いと。

力使ったりとか戦闘とかはまだまだ先になりそうです・・・ではでは～♪

肆話目（前書き）

とある～に投稿するのも約４カ月ぶり・・・お待ちしてくださった方には長々と空けてしまいすみませんでした。

あれから色々内部構成や設定を練り直してみると雑な点が出るわ出るわ。

と、言う訳で。

相変わらずの低クオリティーでお送りする第４話。

前回戦闘描写入るとか言ったけどそれは次回に持ち越しになりました。

サーセン

肆話目

「なんだよ・・・これ・・・・・」

現状報告。

補習を終わらせ、冷蔵庫の補給のために買い物を済ませ。いざ寮まで帰ってくると煙が上がっていた。

どうも火災が起きたらしく、消防隊どころか警備員(アンチスキル)まで集まっており、既に事態を聞き付けた近所の人間が野次馬と化していた。

「しかもあそこは、確か当麻の部屋・・・・」

そう。主に煙が上がっているのは当麻や俺の部屋がある階だった。

「おい！しっかりしろ！！」

この声・・・。

聞こえてきた声に俺は辺りを見回す。

「当麻！！」

「レイ！！」

見つけたのは、ビルの間に身を潜めていた当麻と、インデックスだった。

「インデックス！？なんでここに・・・」

「やべぇんだよレイ！！こいつ、怪我してるんだ！！」

「！！」

当麻に言われ、インデックスを見る。
表情は青ざめ、抱きかかえる当麻のズボンが、膝から下が血でベットリと濡れている。

「とにかく救急車を・・・！！」

「・・だい、じょうぶ・・・だよ」

「！インデックス！！」

「とにかく血を・・・止められれば・・・ゲホっ」

「おい！しっかりしろ！！」

苦しそうにむせ、血を吐くインデックスに、俺や当麻に焦りの色が浮かぶ。

「・・・とにかく、ここじゃまともに止血もできねぇ・・・ちょっと待ってろ」

そう言って、俺は当麻達から少し離れて、携帯を取り出す。

「・・・・水瀬か？俺だ。今寮の前にいる。今すぐ来てくれ。・・・・あぁ、今すぐだ。それと、救急箱と包帯もだ。・・・あぁ、頼む」

「レイ・・？」

「5分もしないうちに水瀬が来てくれる・・・・それまでの辛抱だ」

「レ・・・イ・・・？」

息も切れ切れに、インデックスは俺の名前を呟く。

あの時もっと本気で止めてれば、あのときこいつの言った事を信じてやれば、今こいつはこんな目には合わなかったのか？

俺の中に渦巻くのは、そんな後悔の念ばかりだった。

「レイ様！！」

唐突に聞こえた声に振り向けば、そこに立っていたのは黒の燕尾服を着こなす、眼帯をつけた麗人。

道路沿いに付けた黒のクラウンから降りたそいつは、駆け足でこちらに近づいてくる。

「レイ、誰だ？この人・・・・」

「レイ様、一体何が・・・？」

ほぼ同時に聞いてくる当麻と水瀬。時間が惜しい今は、二人の質問には答えない。

「水瀬、親父のマンションまで頼む。救急箱は車内か？」

「え、えぇ・・・」

「お、おいレイ！！」

困惑する水瀬や当麻の間を素通りし、車へと向かう。

「後でちゃんと話す・・・今はそいつを助ける事が先だ」

「・・・・言い出したら聞かないとこはお前も同じだもんな・・・・解った、急ごう！！」

「・・・かしこまりました」

かくして俺達は、クラウンに乗り込んでその場を後にした。

～～～～～～～～～～～～

「ついたぞ・・・」

「え・・・？あの・・・レイ・・さん？なんかの間違いじゃ・・・」

「ボケてる場合か。行くぞ」

レインは唖然としている当麻を無視して、水瀬と共に中へと入っていく。

運転中のクラウンがたどり着いた場所。
そこは高級住宅街の一角、超がつきそうなほどの高層マンションの前だった。どれくらいの高さかと言えば見上げれば首が痛くなるほどと言えば大まかには伝わるだろう。

当麻は一般的な高校生だし、普段からスーパーのチラシなどには目を光らせるほど彼の財布事情は普段から乏しい。
そんな彼がこんな所に用事があるなんてことは当然今の一度も無く。
自分の存在が今この場において恐ろしく場違いであると感じ、しかしさも当然の如くズカズカと入っていく友人を見て、恐々とした

足取りでその後を追った。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

エレベーターに乗り込んだ二人を見て、慌てて当麻も乗り込んだ。が、二人が口を開く気配は一向に無かった。

（く、空気重っ！！！）

ついでに言うと、エレベーターのスイッチはパネル式になっており、行きたい階を入れてからボタンを押せば、その階にたどり着くようになっている。

現在パネルには、デジタルの赤い光で『４０』と表示されている。

（つまり４０階につくまでこの海底みたいな重みに耐えろってのか！？）

本気で勘弁して欲しい。このままではインデックスよりも先に自分が窒息死すると当麻は思った。

「・・・・インデックス。喋れるか・・？」

ふと、レインは当麻の方に振り返り、今は当麻の背におぶさっているインデックスに問いかける。
ちなみに、ここに来るまでに車内でとりあえず止血だけは済ませた。しかし、依然として危険な状態であることには変わりない。

「・・・レ・・・イ・・・？・・・う・・・ん・・・大丈・・・分・・・だよ・・・？」

途切れ途切れになりながらも、インデックスは必死に言葉を紡ぐ。

「お前がもってる１０万３０００冊の魔導書とやらの中には、傷を治す様なものは無いのか？」

「・・・あるには・・・あるよ・・・？でも・・・あなた達には・・・ううん・・・学園都市の人には、魔術は使えない・・・・」

魔術とは、元々能力（ちから）を持たない人間が、能力を得るために生み出したもの。
「能力の無い人間」のために組み上げられた術式（システム）と儀式は、“回路”が違う「能力のある人間」には使う事が出来ない。

「目的は同じでも手段が違うから相容れないわけか・・・」

科学も魔法も、元は無力な人間が力を得ようとして、道を模索する手段に選んだものだ。しかし、アプローチの仕方が違う分、互い

に反発しあうのだろう。

「そんな・・・・」

――ここまで来て、助けられねぇのか・・・？

当麻の顔に、悔しさと歯痒さが浮かぶ。

「・・・能力者じゃ無けりゃ、魔術は使えんのか？」

「う、うん・・・」

レインの問い掛けにゆっくりと頷くインデックス。その様子を見て、レイは安堵したかのように息を吐いた。

「なら問題ない。水瀬は能力者じゃないから、多分できるはずだ」

「！！ホントかレイ！？」

「頼めるな？水瀬」

集まる視線に、今まで黙っていた水瀬が口を開く。

「・・・ちゃんと説明してくださるなら、お引き受けします」

「・・・・信じる信じないかは、お前次第だが？」

「元より、レイ様を疑ったりはしません」

「・・解った。当麻もそれでいいな？」

「あ、あぁ・・・・」

チン

小気味良いベルの音と共に、奇妙な浮遊感が足元を伝う。

「とりあえず、込み入った話はインデックスの怪我をどうにかしてからだ」

そう言って、レイン・水瀬・当麻・インデックスの４人は、エレベーターを後にする。

〜〜〜〜〜

案内された部屋で、当麻は再び驚愕していた。

広々とした空間、ゆったりしたソファ、巨大な薄型テレビ。

目に映る全てが自分とは縁遠いものばかりだった。

「気になるか？」

物珍しく辺りを見回していた当麻に、レインは問いかける。

「レイ？」

「思えば俺は、自分がどういう人間かは、あまりお前に話した事は無かったしな・・・・どうする？」

「どうするって・・・・」

態々問い掛けると言う事は、聞く気があるなら話してくれると言う事だ。しかし同時に、レイの放った言葉には、拒絶の色が見て取れた。

できれば聞いて欲しくない。

苦笑するレインの表情（カオ）が、そう言っているように感じる。

「・・・・いや、無理には聞かない。いつかレイが話したくなったら、そんときに頼むわ」

「・・・・そうか」

『警告。第二章第六節。出血による生命力の流出が一定量を超えたため、強制的に「自動書記（ヨハネのペン）」で覚醒します』

リビングでぐったりと横たわってい筈の、インデックスの声。

しかし、紡がれた言葉には覇気も生気も無く、ただ機械的に感じるような冷たい声。
直後、インデックスの体がふわりと浮きあがり、無風のはずの室内で来ていた修道服が揺ら揺らと靡く。
『現状を維持すれば、私の体はおよそ15分後には必要最低限の生命力を失い、絶命します。指示に従って、適切な処置を施していただければ幸いです』
「聞いての通りだ。インデックスの事は、一旦お前に任せる。頼むぞ水瀬」
「解りました」
「行くぞ当麻」
「あ、あぁ・・・・」
レインに促され、当麻は彼に着いて行こうとする。
「あ、あの！」
「？」
「当麻？」
「そいつの事、よろしくお願いしますっ！！」
水瀬へと振り返った当麻が、腰を曲げて勢い良く礼をする。
目の前の少年の突飛な高度に、水瀬は少しばかり驚き、そして優

しく微笑んだ。

「最善を尽くさせていただきます。ですから、どうかご安心を」

～～～～～

あれから、部屋の外に出た俺は、玄関前で当麻から何があったのかを聞いた。

当麻の部屋の前で倒れていたインデックス。それを追ってきた炎を扱う『魔術師』と名乗った男。

そして、インデックスの言っていた１０万３０００冊の魔導書の在り処。

「嘘じゃぁ無かったって訳か・・・」

『この世に“ありえない事”なんて無い』とは誰の言葉だったか。

やっぱあの時信じてやれば、こんな結果には為らなかったのかと思うと、無性に悔しくなる。

ただそれよりも腹立たしい事と言えば・・・・

「おい、当麻。てめぇ何で俺に連絡寄越さなかった？」

「そ、それは・・・・・」

いい辛そうに口籠る当麻。まぁ、こいつの考える事何ざ大体予想が付く。

「大方、俺を巻き込みたくねぇとでも思ったんだろ？」

「・・・・・」

図星、見てぇだな。

「ったくよぉ・・・今更だがてめぇは一人で抱え過ぎだ。第一インデックスについてはあん時俺も居ただろうが。無関係だとでも言い張るつもりか？」

「・・・悪い」

「・・・はぁ。まぁいい。今度やったら右頬に一発だ。いいな？」

「あぁ・・・・」

渋々と言った感じで頷いてる当麻だが、こいつの事だ。どうせまた知らねぇ間にいろんな物抱えるに決まってやがる。

まぁ、約束は取り付けたし、その時には思いっきりブン殴らせてもらうが。

「レイ」

「あん？」

「・・・・ありがとな」

「・・・ふんっ」

ホント、今更だっつうの。

「それにしても、効果合ったんだな『幻想殺し（イマジンブレイカー）』」

「ああ。これならどんな魔術師が相手でも問題ないぜ」

「アホ。右手限定なんだから下手すりゃ即死だろうが」

「っと、そうだった」

妙な所で調子に乗りやがって・・・。

しかし、その魔術師の男が操った炎にも効く何ざ、ますます意味不明だな幻想殺し。

俺が最初当麻に聞いたときは、個々人が持つＡＩＭやその根幹たる“自分だけの現実（パーソナル・リアリティ）”に干渉する能力だと思っていた。だが、インデックスから聞いた魔術の大まかな原理を聞くに、対象となるのは異能を元に発生する“力”全てなのだろう。

そもそも、幻想殺しが異能を殺すなら、幻想殺し自体が死ぬはずだとも思う。

まぁ、それについては考えるだけ馬鹿らしい矛盾だ。自分の右手

に右手じゃ触れないみたいなもんだろ。
五十歩百歩の方がまだましだ。
「御二人とも。一先ず落ち着きましたので中へ」
言いながら、玄関を空けた水瀬。とりあえずは、水瀬にも話しといてやるべきだな。何より話すって約束しちまってるし。
まぁ、水瀬なら、親父に話が行く心配もないだろうが。

〜〜〜〜〜

部屋へと戻ったレインと当麻。
室内に入ると、黒革のソファに寝かしつけられているインデックスの姿があった。とりあえず峠は越えたのだろう。今は顔色も良く、安らかに眠っていた。
それからレインは、カーペットの上に胡坐をかいている彼に、対面する様な形で正座している水瀬に、当麻も交えながら事の経緯を説明した。
「まぁ、魔術云々については、この目で見てしまったので否定はしません」

説明を聞きながら、水瀬は数分前の出来事を思い出す。
今でこそ安らかに眠っている少女が、先程まで血だらけで今にも死にそうだったのだ。
それを目の前で、しかも一瞬で直してしまったのだから、信じない訳にもいかなかった。

「とりあえずはこの子の着るものと、何か栄養のあるものを買って来なければなりませんね」

（着る物って・・・この人こいつのサイズわかんのか？って言うかインデックスのこの服は一体・・・）

「服のサイズくらい見れば解ります。あと、今着せてるのはレイ様の子供の頃のお古です」

「心を読まれた！？」

「コントはいいから、早く行って来い」

レインのツッコミに促され、立ち上がる水瀬。

「レイ様」

「あ？」

背を向けながら話しかけてきた水瀬に、レインは疑問符を持って返した。

「どうやら随分とお変わりになられた様で。この水瀬、大変嬉しく思います」

「・・・そうか」

「えぇ。それでは、行ってまいります」

そのまま玄関へと足を運ぶ水瀬の、嬉しそうな横顔が、当麻には見えていた。

「「・・・・・」」

沈黙。

水瀬が居なくなって、なんとなく部屋の空気が重々しくなってしまう。

（そう言えば水瀬さん、レイの事様付けで呼んでたよな・・・）

思えば当麻は、隣で沈黙を貫いている友人の事を詳しく知っている訳ではない。

自分の高校の水準よりも数倍上だろう頭脳の持ち主で、大型バイクと免許持ちで、護身用に格闘技を習っているらしくて、少し口が悪くて、でも根は優しい奴で、ツンデレで。

知っている事と言えばそれくらいだ。

本人が言いだすまで聞かないと言った手前、今聞くのは憚られる。

第一相手の家庭事情を根掘り葉掘り聞くなど、お世辞にも行儀が良いとは言えないだろう。

そう思い、当麻は敢えて聞かない事を選択したのだが――

「・・・・水瀬は俺の執事兼教育係だ」

「レイ？」

「聞きたいんだろ？顔にそう書いてあるぞ」

「うぇ！？マジでか？」

何たる醜態だろうか。無意識とは言え顔に出ていたとは。
自分の節操の無さに当麻は落ち込んでしまう。

「何独りでダウンしてんだよ・・・。別に構わねぇさ。丁度いい機会だ、そこのシスターが起きるまでは話してやる」

それから、レインは当麻の質問に、ポツリポツリと答えていった。
レイ自身の正体、今住んでいる寮にいた理由、水瀬との馴れ初め等々。彼が所々大雑把に話していたせいもあってか、実際には1時間と経っていないだろう。
しかし、当麻にとってはまるで一日分語り明かしたかのように感じるほど、濃い内容に感じた。

「そういう訳だったのか・・・」

「ま、我が事ながら随分ガキっぽいとは思うけどな」

そう締めくくるレインの表情は、酷く呆れた様なカオで。
当麻には、何だかそれが、寂しそうにも感じた。

「・・・ん・・」

「!?インデックス!?」

しばらくして、寝苦しそうにしていたインデックスが目を覚ます。心配そうにインデックスの傍に寄る当麻とレイン。

「気分はどうだ?インデックス」

「・・・レイ・・?・・・うん・・大分楽・・だよ?」

「そうか・・」

「・・ごめんね?・・・こんなにメーワク掛けるつもり、無かったのに・・・」

「フン。メーワクついでだ。この際お前も全部吐いちまえ」

「・・・・解ったんだよ・・」

――――“必要悪(ネセサリウス)の教会”。

同じ十字教の中で、“対魔術師用”の技術に最も長けたイギリス清教における、魔術師を討つ為に、魔術を調べ上げ、対抗策を練る特殊機関。

「私は一度見たものは絶対に忘れないから、彼らの手によって１０万３０００冊の魔導書を・・・・叩きこまれた」

「世界中の魔術を知れば、世界中の魔術を中和できるはずだから。でも――――」

「お前を狙ってる連中の目的は、別にあるってのか？」

当麻の問い掛けに、インデックスがゆっくりと頷く。

「私の頭の中を使えば、世界の全てを捻じ曲げる力だって手に入れられるの――――」

再び訪れた沈黙は、先程よりも一層沈鬱としたものになった。

（リアル世界滅亡の危機ってか？つうか、こんな年端もいかねぇガキに、なんつうもん背負わせやがんだ・・・）

インデックスの口から語られた真実は、およそ彼女ほどの年の少女が背負う様な物では無かったのだ。

自分の心に渦巻く感情が、より一層濃さを増していくのをレインは感じた。

「・・・・ごめんね」

話を聞いて押し黙ってしまった二人を見て、インデックスは申し訳なさそうにポツリと呟く。

ベチッ

「ひゃっ！？」

そんなインデックスの顔目掛けて、濡れタオルが投げつけられる。ぶつけられた勢いに押され、そのままソファに倒れ込んだインデックスは、投げてきた犯人の顔を見やった。

「ふざけるなよ。お前が今言わなきゃなんないのは“ごめんなさい”じゃねぇだろ？」

顔を伏せる彼の言葉に、インデックスは困惑し、レインは“あぁまたか”と言った風に溜息をつく。

「“助けてくれ”、だろ？」

「当麻・・・・」

「・・・・はぁ。ったくお前は相変わらずのお人好しだな、当麻」

「レイ・・・」

「関わった以上、この馬鹿一人に任せるのは不安だからな。俺も協

力してやる」

「・・・ふぇ・・」

二人の言葉に、インデックスの目尻に涙が溜まる。
それを見た当麻は『やっちまった』と狼狽し、レイはそれを見て『当麻が泣かせた』とからかい。
そこにちょうど帰ってきた水瀬も加わり、やや騒がしくなるのだが。

ここでは少々割愛させてもらおう。

少なくとも、現時点を持って、少女は一人では無くなったのだ。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

レインのマンションより少し離れたとある場所に、一見妙な格好をした人影が二つ。

一人は、2メートル程の長身に、全身を覆うように纏った漆黒のマントと、炎のように紅い髪の青年。

もう一人は、女性の様で、肌の露出の大胆さ以外については、ある程度普通のジーンズや白いTシャツに、纏めても尚膝下まで届く黒髪のポニーテール。しかし、その手に持っているのは、異常なまでに長い、鞘に収まった巨大な刀。

「あの建物に？」

女性の方が、目の前にそびえ立つ高層建築を見ながら、隣の青年に尋ねる。

その問いに、青年は頷く事で答えた。

「やられ際に追跡の刻印（ルーン）を張って正解だった。これ以上事が大きくなるのはごめんだが――――」

「私たちにも、あの子にも、残された時間は少ない。急ぎましょう」

自分達の使命の為に、二人は前へと踏み出す。

その時――――

「こんばんわ」

金髪の青年が、二人の行く手を遮った。

伍話目（前書き）

どうも、白眉です。

久々に短めの期間で更新に成功しました。

今回は色々初登場の人とかが居る訳ですが、果たしてこんな一人称で大丈夫か、ちゃんと原作に近いキャラを出せているか果てしなく微妙です。

では、第五話目。どうぞ～

伍話目

「こんばんわ」

魔術師――ステイル＝マグヌスは困惑していた。

時刻は深夜。

一般人ならとうに眠りについてる時間だ。路地裏などを溜り場にする様な人間がいたとしても問題無い。

ここ周辺には人払いのルーンを張った。この都市の人間で気付ける者など片手で足りるほどの数しかいないだろう。

だが、目の前の少年は違う。

その容姿から察するに、恐らくは男なのだろうが、月に背を向けて立っている為に影が差し、その表情は窺えない。

しかし、ただ呆然と立っているだけのはずの彼から感じる、言い知れない威圧感。

そして何よりも、人払いのルーンを張っているにも拘らず、彼がここに存在し、あまつさえこちらに声を掛けてきた。

ステイルの警戒心と懐疑心を掻き立てるには、十分な要素が揃っていた。

「・・・あなたは？」

「神裂、無視しよう。今は一刻も早くインデックスを・・・」

目前の少年に話しかけようとした同僚――神裂火織に、ステイルはスルーすることを提案した。

自分達の目的はあくまでも彼女を保護する事。こんな所で余計な時間を喰っている場合ではない。

しかし、ステイルの正論に、神裂は静かに首を横に振って否定する。

「いいえステイル。どうやら彼は、私達をここから先に通すつもりなど微塵も無いようです。貴方も薄々気づいてるんでしょう？」

「・・・できれば気付きたくは無かったんだがね」

やれやれと言った風に肩を竦め、彼は懐から数枚のカードを取り出す。

五茫星の中心に文字の様な物が書かれたそれを、彼は空中にばら撒く様に放り投げる。

すると、宙に撒かれたカードは、まるで一時停止のようにピタリと止まると、ステイル達と少年を囲むように四方八方へと飛び、地面や街灯、建物の壁などに張り付いて行く。

「・・・・赤い髪に黒マント。背は異様にデカかった・・・だったか？あんたが魔術師って事で間違いないよな？」

「・・・そうだと言ったら？」

「別に。ただ確認したかっただけだ。勘違いで他人をボコッちまったんじゃぁ、情けねぇにも程があるからな」

本当に興味が無さそうに、少年はただ確認のためだけに聞いたらしい。ここまで声に感情を感じないと言うのも、おかしなものだと、ステイルは背筋が寒くなる思いだった。

「・・・一つ、いいでしょうか？」

「あ？」

神裂が手に持った大太刀を油断なく構えながら、少年へと問いただす。

「あなたはなぜ、私たちの邪魔をするのです？この都市の人間には、あの子の中の魔導書を使う事は出来ない――――つまる所、あの子を庇い立てる理由は然程無いと思いますが？」

「・・・・」

しばしの間を持って。

少年は気だるそうに溜息を吐くと、頭を書きながら面倒くさそうに喋った。

「確かにお前らの言う通りだ。俺はあいつのことなんてなんとも思っちゃいない。

いっちょまえの正義感なんてのも持ち合わせちゃいない。
元より魔術は専門外だし、ぶっちゃけお前らの事だってどうだっていいさ。

魔術師だろーが、奇術師だろーが、手品師だろーが。たとえ人殺しみてぇな頭のイカレたやつだとしてもだ。

でも――――あいつにとっての敵なら、話は別だ。
あいつの敵は、俺の敵だ」

瞬間、少年がステイル目掛けて、弾丸の様に突っ込んでくる。
対して、神裂がステイルを庇うように、二人の間に割って入った。
上段から放たれる右ストレートを、鞘に収めた大太刀で防ぐ神裂。

「ぐぅっ！！！」

叩きこまれた拳の威力に、神裂は膝を着く。この事実に一番驚いたのは、拳を受けた本人ではなく、庇われたステイルの方だった。
そう。少年が放った拳は、異常なまでに重かったのだ。少なくともステイルから見れば、聖人の力を持つ神裂に膝を着かせるなど、普通の人間には到底できない。

なら、それがこの少年の力なのか？
身体能力の強化。ありきたりではあるが、脅威にはなりえない。
ならなぜ？自分はこんなにも焦っているのだろうか？

「ステイル！！」

「っ！！下がれ、神裂！！」

神裂の一括に、ステイルは渦巻いていた思考を切り替える。
ステイルの指示に、神裂が少年を弾いてその場から飛び退く。同時に、ステイルは少年との距離を詰めた。

『炎よ（Kenaz）――』

ステイルの手中に光が集まる。その色は、燃え盛るような赤。

『――巨人に苦痛の贈り物を（Puri sax auplz Gebo）』

宙を裂くように振るわれるステイルの腕。
それとまったく同じ軌道を描きながら、彼の手の平に燻っていた火花が、爆発的に膨らみ、空間で爆ぜる。

一瞬にして生まれた業火は、目の前の少年ごと視界を呑み尽くした。

「・・・やった・・のでしょうか？」

一連の動作を見ていた神裂が、ステイルに問いかける。

「わざわざ炎剣まで使ったんだ。相手が能力者でも、力を使う暇すらなかったさ」

先程使った魔術は『吸血殺しの紅十字』。
摂氏３０００度にも及ぶ炎の剣は、たとえ相手が不死の一族でも、一瞬にしてその肉体を蒸発させる。
先の戦闘では無効化されてしまったものの、それは相手の方が異常（ユラー）だっただけで、この魔術そのものが無くなった訳でもない。
タイミングも、動作も完璧に決まっていた。生きている筈もない。

しかし、ステイルの心は未だ焦燥感に囚われていた。
“早くこの場から去ろう”――勝利の要因が、逃げる事への言い訳に感じるほど、彼は焦っていた。

パチンッ

「・・・？」

「神裂、早く行くぞ」

二人の後方で、小気味の良い、少し乾いた音が響く。
急かすステイルを尻目に、神裂は足を止め、音がした後方を振り返る。

「っ！？」

「どうした、神裂！！早・・・く・・・・」

立ち止まってしまった彼女を疑問に思いステイルもまた振り返った。振り返って、しまった。

そこには、先程まで猛威を奮っていた炎は何処にも無く。

殺した筈の金髪の少年が、最初に会ったときと変わらない表情で二人を見ていた。

絶句。

同時に、思考が一気に乱されるのを、ステイルは感じた。

そして、彼の中で疑問が一つ氷解する。

出会って最初の彼に、あれだけ警戒した理由。

片付けた筈なのに、逃げたくなる様な気持ちに駆られた訳。

それら全てが。

少年に対する“恐怖”なのだと――――

魔術師――ステイル＝マグヌスは悟ったのだ。

～～～～～～～～～～～～

降りしきる雨。

白濁とした意識の中、わたしは目を覚ました。

頭を上げ、見上げた空に映るのは、灰色に淀んだ雲が覆い尽くす景色。

「にげなきゃ・・・・」

逃げる？誰から？

解らない。でも、何時までもじっとはしていられない。わたしは、危険だから。

重たくなった体を引きずる様に、歩き出し。
街中を、宛ても無く歩く。

「ここ・・・ドコ・・・・・・？」

右も左も、覚えのない景色。いや、知らない景色だ。

コワい――――――

街行く人々から向けられる奇異の目も。
知りもしない景色も。
会ったことも無い自分を追う何かも。

自分が、誰なのかさえ分からない事も。

目に映る全てが、まるで恐怖の対象で。自分一人が、取り残されてしまった様になる。

「誰か――――――――」

「・・・・っ」

息苦しい。
また、一人だった時の夢を見た。
体中が、汗塗れになっちゃってる・・・・。

「・・・・んっ」

目に溜まってた涙を拭う。何だか、嫌なもの見ちゃったなぁ・・・・。

「・・・起きたか」

「ふゃっ！？」

「朝から奇声上げんな、喧しい・・」

ビ、ビックリした・・・・。

「“喧しい”なんて、女の子に使う言葉じゃないと思うよ？レイ」

「生意気な事言ってんな・・・・」

頭を書きながら、レイは面倒臭そうにこっちを見てる。と言うか――

「エプロン？」

「あ？エプロンがどうかしたか？」

どうかしたって言うか・・・・なんだか意外過ぎるね。

レイは見た目が不良みたいだから、家庭的な印象ってゼロなのに。

「・・・何だよ」

「いや、似合わないなぁって」

「殴るぞ？」

「ちっ違う！！違うんだよ！！ただ意外って言うか驚きがあっただけで悪気があった訳じゃないのだからゲンコツは勘弁してぇぇぇぇぇ！！！！！」

「・・・悪意が無いのは認めてやるが言葉のチョイスに棘を感じるな・・・」

レイは震えながらも何とか振り上げた右手を収めてくれた。

うぅ・・・レイのゲンコツはとっても痛いから勘弁して欲しいよ・・・。

「おら、もう飯できてっから、当麻の奴起こして来い」

「ゴハン！？」

グゥゥゥゥゥゥ・・・

おぉ・・・忘れてたけど、ご飯って聞いたら即座に反応したんだよ。さすがわたしの体。健康な証だね。

「目聡い腹してやがるな・・・」

「む・・・失礼しちゃうな。元はと言えばレイのご飯が美味し過ぎるのいけないんだよ？」

正直レイの家事スキルは神がかってるね。あんなに美味しいご飯が作れるならお店始めてもいいんじゃないかな？

「お前は食いたいのか食いたくないのかどっちだ」

「誰も食べないなんて一言も言ってないんだよ！！」

「解った解った・・・さっさと行って来い」

促されたわたしは、ベッドから飛び起きてドアまで歩く。おいしいご飯が待ってるなら冷める前にとうまを起こさないとね。

もしもすぐ起きなかったら当麻の分のご飯もおいしく頂いちゃうかも。

ドアノブに手を掛けた所で、ふと、思い出した。

「・・・・レイ・・」

「あ？」

急に振り返ったわたしを見て、レイは不思議そうな顔をしてた。

「・・・ごめんね？・・・・」

「・・・・何なんだ、急に」

「とうまは“ごめん”なんて言うなって言ってたけど、やっぱり、謝るよ。わたしが、あなた達を巻き込んだのは、事実だから」

「・・・・・」

無言。

それからレイは、呆れるような目でわたしを見て、呆れたように溜息をついて、面倒くさそうに頭を掻きながら、こう言った。

「俺は“謝る”って言うのはあんまし好きじゃねぇな。懺悔だの何だのっつうのは、要は許されたい、罪を浄化して身軽になりたいってわけだしな。お前がそういうつもりで謝るんなら、俺からすりゃ迷惑なだけだ」

「・・・・はは・・」

手厳しいなぁ・・・・。

何だか、見透かされた気分だ。もちろん、申し訳ないって気持ちは嘘じゃない。でも、レイの言う通り、許されたいって気持ちもあった。

「だから。謝るくらいなら、次どうすりゃいいか考えろ。躊躇ったりなんてするな。半端に関わられるのが一番面倒だしな」

「・・・・頼ってもいいの？」

きっと、無事じゃ済まない。

下手したら、死ぬことだって充分考えられるのに。

「お前みたいなガキが、一丁前に遠慮なんかしてんな」

「・・・・レイって“つんでれ”？だね」

「待てコラ誰から聞いた」

「とうまが言ってたよ？レイは“つんでれ”だーって」

「いい根性してやがんなあのウニ頭・・・・！！」

何だかレイが怖い。笑顔なのに目が笑ってないよ。

きっと近いうちにまたとうまが“不幸だー”って叫ぶかもしれないね。

「レイはとうまが大切なんだね」

「・・・ホントさっきから何だお前？」

レイはギョッとしたような、変な物でも見るような目でこっちを見た。さっきの“ガキ”呼ばわりの意趣返しは成功したみたい。

言葉や態度は少し乱暴だけど、レイは本当にとうまが大切なんだと思う。たった数日しか二人の傍に居なかったのに、二人の呼吸は凄くピッタリで。

そんな二人を見てたら、なんだか懐かしい様な、羨ましい様な。ちょっとだけ、寂しい様な。不思議な気持ちになった。

そんな事を思いながら、私はとうまを起こしに部屋を出る。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「もうっ！！またですか鷹嵜ちゃん！！」

職員用駐車場の端に響く、子供っぽいソプラノ。
バンディットを止めて降りた所を丁度発見されてしまった。一応言っとくが免許は持ってるぞ？

最初のころは駐輪所に止めてはいたんだが、群がる自転車の中、一角だけ大型バイクと言う場景があまりにもシュール過ぎたため断念。
丁度いいスペースがあったため、職員用の駐車場、その端の端を間借りする形になったわけだが。
当然、職員用なのでエンカウント率は高い。何人かの職員は黙殺するか苦笑してさらっと注意する程度なんだが、彼女――――こと月詠小萌に至っては存外ねちっこかった。
初登校当初から続いているこのやり取りは、半ばこの高校の恒例行事と化し、こちらを遠巻きに見る生徒のクスクスと言う微笑が聞こえるくらいだった。

「何度も言ってるじゃないですか！まだ未成年なんですからバイクで通学するのはダメですよって！！」

「外見と実年齢がチグハグなあんたに言われたかねぇよ」

「またそういう事を言う！！」

俺の煙に巻く様な態度に、月詠女史はなかなかに怒り心頭らしい。
それから１０分近くこんなやり取りが続いたわけだ。やれ、危ないだとか。やれ、バスがあるからそちらを使うべきだとか。
別に俺はこの人の事が嫌いってわけでもない。心配してんのは伝わるし、親身になってくれるのはありがたいことだろう。
ただ、やはり少々鬱陶しく感じるのは、この年齢層の少年少女特

有の反抗期のせいだろうか？
あの雑食男（あおがみ）なら、喜び勇んで息を荒くするんだろうが。
「おっはよー、タカやーん！！」
そんな折だ。土御門（バカ）がこっちにやってきたのは。
「小萌センセーもおはようございます」
「おはようございます、土御門ちゃん」
互いに朝の挨拶を交わすちびっ子と土御門。和気藹々とした空気の筈が、俺からすればそうは見えなかった。
土御門元春――うちのクラスにおいて、三馬鹿（デルタフォース）の一角を担う男だ。
胡散臭さが服を着て歩いてるような奴だと、俺は認識している。
あぁ、あと重度のシスコンか。
「ん？タカやん、カミやんは今日も来とらんのかにゃー？」
「あ、あぁ。まぁ・・・な・・・」
「確か、１０年ぶりに義妹さんと再会したんでしたっけ？」
「いやぁ、まさかカミやんが隠れシスコンだったとはにゃー」
「・・・」
ん？誰と誰の事かって？インデックスと当麻の事に決まってんだ

ろ。

今、当麻は久々に再会を果たした妹の為に色々と世話を焼いていると言う、トンデモ設定になっている。

水瀬をあの部屋に常駐させるって方法もあったが、タイミングの悪いことに親父から急な呼び出しがかかったせいで、しばらく日本を離れることになった。

結果、インデックスを一人で留守番させる訳にもいかず、無能力者の俺よりも幻想殺しのある当麻の方が幾らかましだろうと言う事で、当麻が残る事になったわけだ。

まぁその影響で、当麻は実はシスコンだったと言う在らぬ噂がクラス内に蔓延する形になったんだが、本人には言って無い。

別に怖いとか気まずい訳じゃないぞ？ただ言う必要性を感じないだけだ。

我ながら、無茶苦茶な言い訳だと思ったが、思いの外。ちびっこは溜息一つで追及を止めた。

その代わり、当麻へは他の生徒より５割増しの課題プリントが課せられる結果になったが。

「こう言うのを、恵まれてるっつうのかね・・・」

少なくとも、不幸ではないだろう。

本当に不幸だと言うなら、それは一体どんな状況か。想像さえ着かない。或いは、１０年前の時も、幸運だったと言えるのかもしれない。

なんせまだ、五体満足で生きてるわけだし。少なくとも、今を不幸だとは思わない。

「鷹嵜ちゃーん！どうかしたんですかー？」

「早く来るぜよー！タカやーん！！」

「ん？おう」

鞄片手に、とりあえずは教室へ向かう事にする。

その日の夜。俺は、道の真ん中でボロボロになってる当麻を見つけた――――――――。

陸話目（前書き）

どうも、白眉です。

今回はステイル達魔術師側メインのお話。
なので、本編的にはあんまり進んだ感じがしません。

では、どうぞ～

陸話目

ロンドン中心部に位置する、『聖（セント）ジョージ大聖堂』――――――

そこが、禁書目録（インデックス）と呼ばれる少女が育った場所。

「かおりーーーーっ」

拙い足取りと言葉で、まだ幼い彼女は無邪気に笑いながら、自身の親友たる存在の元へ駆け寄る。

ボフッ

「お帰りなさい」

元気に駆け寄ってきたインデックスを優しく抱き止めながら、彼女――神裂火織は頬を綻ばせる。

「どうでしたか？バチカンは」

「んっとね・・・暗かった！あ！あとカビ臭かったよ！！」

「まぁ・・・だ、大丈夫でしたか？何か、嫌な事をされたりなんて――」

「あり得ない事を言うな神裂」

神裂の不安げな問い掛けに答えたのは、彼女ではなく男の声。聴こえた方向に立っていたのは、やけに身長の高い人物だった。

体をスッポリと覆ってしまう程の黒いマント、そのマントに付いた黒のフードを、目深に被るという出で立ちだ。

「この僕が付いてるんだ」

自信たっぷりの声音で、その人物は被っていたフードを取り、炎のように赤い髪を陽光の下に晒す。

「インデックスに害を成す輩は、半歩だって近づけさせない！！」

死霊術書（ネクロノミコン）、ソロモン（レメゲトン）の小さな鍵、“法の書”、テトラビブロス、アルス・ノトリア・・・。

『目を通しただけで魂が穢れる』――そう教会が指定した数多の“邪本”“悪書”。

世界の各地に封印されたそれを、頭の中に写本（コピー）し保管する。

それこそが、禁書目録（インデックス）たる少女の役目。

「ですがやはり、世界中を飛び回って覚えているのが、地下室と本の山ばかりだなんて・・・」

眼前で地面に文字を描いて遊ぶ少女の、余りにも狭過ぎる世界(ちしき)。
それを見て湧き上がるのは、憂い、悲愴、同情――――。
連れ回しているのが自分達(きょうかい)だと解っていても、やはり、そう思わずにはいられない。

無邪気に笑っている所を見れば、尚更。

「同じだよどの道。あの子にとっては・・・ね」

「！・・・本気で言っているのですか？」

神裂は、彼が呟いた言葉を聞き逃さなかった。それは――――それでは、余りにも悲し過ぎる。
それでは余りにも、彼女が報われない。
両者の間に、居たたまれない様な空気が満ちる。

「か・・おり・・」

ふと、神裂は背中に重みを感じ、振り返る。
危うげな足取りで、インデックスがもたれ掛かってきていた。

「インデックス？」

「何か・・・クラクラする・・・。おなかへった・・・のかな・・？」

そう言うと彼女は、荒い息遣いのまま、ズルズルと神裂の方に倒れこんでしまう。

どうも様子が変だ。よく見れば、顔も蒼白になり、体はカタカタと小さく震えている。

「インデックス！？」

「待て！何かおかしいぞ！！」

「インデックス！インデックス！！」

神裂が必死に呼びかけても、インデックスは目を閉じたまま、苦しそうに横たわっているだけだった。

これが、必要悪（ネセサリウス）の教会の魔術師、神裂火織と、ステイル＝マグヌスが、最初に経験する1年目の、3日前の出来事。

〜〜〜〜〜

「そう・・・禁書目録(インデックス)が監視の役、御苦労であったわね」

「・・・・別に、頼まれてやっているわけではありません」

教会内の一室、さまざまな調度品が不規則に飾られたその部屋で、女はステイル達への労いの言葉を口にする。

それに不快感を覚えたステイルは、眉をひそめて投げ遣りな言葉を返す。

「あら、そうなの」と微笑を浮かべるその女は、どうでもいいと言った態度で、窓の縁に腰を下ろす。侮蔑と嘲笑を含んだかのように見えたその笑みに、ステイルは心の中に黒い感情が燻るのを感じる。

「最大主教(アークビショップ)!!」

「他に・・・他に方法は無いのですか!?インデックスの記憶を消す以外に手立ては・・・」

「無い」

焦燥に駆られる神崎の言葉を、女は取り付く島も無く即答してのけた。

「重ねて申せし事だけど、このままでは“アレ”の頭がパンクして、死に至れるのも時間の問題でしょうよ」

チグハグな喋り方で、女は語る。

「人間の脳の中で使える容量は存外小さしもの。其れを“忘るる”ことによって、『いらない記憶』を整理し――――百余年もの長きにおいて、脳を動かし続けていられるのだけれど・・・・」

「完全記憶能力者のインデックスにはそれが出来ない」

ステイルが紡いだ言葉に頷きながら、直も女は語り続ける。

「さにありけるのよ・・・ただでさえあれの脳の８５％は１０万３０００冊の魔導書の“知識”で埋め尽くされている訳だし。残り１５％で“忘るる”ことのできない禁書目録が普通の生活を送るには、一年周期で記憶を削ってやる他に術は無かろう」

「これも禁書目録が為」

そう語る女の、表情（カオ）に浮かべた笑みは。

「最大限の、人道的処置なのよん♪」

どこか、胡散臭いものだった。

〜〜〜〜〜

先の部屋とは別の一室。
手当たり次第に掻き集めたのだろう、部屋中に散らばっている古本や骨董品（アンティーク）には統一性と言うものがまるで見受けられなかった。
中には読めるのかどうかすら分からない文字で書かれた物や、風化して今にも崩れてしまいそうなボロボロな物まであった。

「結局、全部無駄だったか――――」

無数の本に埋め尽くされた室内を見回して、ステイルはそう呟いた。
この部屋にある物は全て、彼が“ある目的”の為に集めたものだ。
無論、中には自分の力の研鑽の為に手に入れた物もあるだろうが、その力もまた、彼自身が目的のために欲したものだ。

「クソッ」

置いてあった一冊を手に取り、ステイルはそれを机の上に叩きつける。
床上に散らばっていた用紙が風で宙に舞った。

自分を取り囲むかのように置いてある本棚が。そこに詰め込まれた本が。床上に乱雑に積まれた書籍や、適当に放られた道具が。
その全てが、自分を嘲笑っているかのように感じた。
自分なりの方法で、自分にできる範囲で。最大限、目的を成すための努力をした。

してきた、つもりだった。

しかし、結果は先程告げられた通り。自分では、何の役にも立てないと、そう痛感せざるを得なかった。

余りに無力。全ては徒労に終わり、希望どころか夢さえも見出せない。

一番近くに居る筈なのに。“守る”と、そう言ったはずなのに。

一番守りたいものに対して、こんなにも無力だ。

何より一番許せないのは、こんな結果しか出せない、自分自身。

湧き上がってくるのは、苛立ち、不甲斐なさ、歯痒さ、申し訳ないと言う懺悔。

「ステイルぅ〜〜〜・・・」

そんな折だ。今の彼の心境とは全く逆方向の声が聞こえてきたのは。

「イ、インデックス!?頭痛は!!もう大丈夫なのかい!?」

「うん!お腹いっぱい食べたらね、治っちゃった!!」

慌てふためくステイルとは裏腹に、あどけなく笑って返すインデックス。

「最近よくなるんだよね。“ジビョウのシャク”ってやつなのかな？」

いや、それは違うだろう・・・。
彼女のボケに、内心突っ込みを入れるステイルだった。

ふと、インデックスの視線が、机の上に向かう。
その机の上に置かれた、メモ用紙ぐらいの小さな紙に書かれた模様は、彼女が見慣れた物とよく似ていた。

「これってルーン？こんなの見たことないかも」

もっと良く見てみたい。ちょっとした好奇心に駆られ、その紙に手を伸ばす。
しかし、その紙を引っ手繰る様に自分の懐に隠したステイルによって、結果宙を掴むだけに終わる。

「ステイル？」

「あ、いや・・これはその」

「何々？何かあるの？」

「別に、大した物でもないよ・・・」

「えぇ～！！気になるよ～」

食入るように聞いてくるインデックスに、ステイルは根負けしたように肩を竦める。

「これは・・・大切な人を護る為に創った、新しい文字（ルーン）だよ」

「新しいルーン・・・・・」
「けど、未完成なんだ・・・禁書目録たる君が見る様なモノじゃないよ」

「あのね、ステイル」
少女(インデックス)は、言った。
「私の中にはね、たくさんの魔導書(ほん)が溢れてて、どこの国の文字だって千年前の呪文だって、書き出す事が出来るよ」

「でも――――新しいものは創れない」

「それは・・・キミは魔術師じゃないんだし――――」
「ううん」

「すごいよ、魔術師(ステイル)は」

笑っていた。
ただ純粋に、無邪気な顔で。

その魔術が、インデックス自信を苦しめていると言うのに――――
命さえ、奪ってしまおうとしているのに。

「違う」

違うんだ。

「僕は、ただの半人前の、未熟な魔術師にすぎない」

君を助けることすらできない、無力な魔術師(にんげん)だ。

でも――――

「君は違う。常人なら一目見ただけで発狂しかねない、十万三千冊の管理者だ」

「この世でたった一人、君と言う存在にしかできない事なんだ！」

君以外の存在には成し得ない。君だからこそ。

「・・・そっ・・・かなぁ・・・・・？」

「そうだとも！」

気恥ずかしそうに問うたインデックスに、ステイルはハッキリと答える。

彼にとってそれこそが、ルーンを刻み続けている理由だった。

～～～～～

聖堂地下にある神殿、その中心に位置する場所に、禁書目録(インデックス)は横たわっていた。
眼は閉じられ、息は荒く、顔には生気の色は無い。苦しんでいる事が見て取れる今の彼女の状態は、時間制限(タイムリミット)が近い事を示していた。

「もう限界です・・・早く処置を！彼女の苦痛を取り除いてあげてください！」

友の身を案じた神裂が悲痛な叫びを上げる。
その言葉に、彼女達の周りに居た黒装束が、構えながら何かを呟き始める。

「・・・な・・・・に・・・・・・」

苦しみに苛まれながらも、周囲の空気が変わり始めた事に、インデックスは薄らと開けた視界で気付く。

「大丈夫です。少しの間眠っていれば、すぐに楽になりますから・・・」

せめて不安にさせまいと、神裂はインデックスに優しく語りかける。

「・・・う・・・・・うぅ・・・・」

「苦しいのですか？インデックス」

「い・・・や・・・・・だよ・・・」

「私・・・・忘・・・れない・・・・忘れたく・・・ない・・・！かおりも・・・ステイルも！絶対・・・・忘れないから・・・・っ！！」

クシャクシャに泣きじゃくりながら、インデックスが紡いだ言葉。事ここに至っても、彼女にとっては自分が死ぬことより、大切な人たちを忘れてしまう事の方が、何十倍、何百倍と辛かったのだ。

「・・・インデックス」

神裂は、ジーンズのポケットから、一枚の紙切れを取り出し、彼女に手渡した。

「お護りです。私たちが、これからも良き仲間（とも）でいられるように」

それは、なんの事は無い、一枚の写真。

嫌がるステイルを、インデックスが強引に引く様に抱きついて、憤慨した彼を神裂が宥めている。

神裂が記念にと思って持ってきたカメラで、3人で撮った唯一の一枚。
普段から文明の利器に頼ることの少ない彼らが、唯一形の残る手段で作った。
解りやすい絆の証。

――――心のどこかで、こんな平穏が続けばいいと思った
――――彼女が笑っていて、それに釣られる形で、自分や神裂が笑いだす
――――逆があっても良いだろう。僕や神裂が、彼女を笑顔にする。そんな平穏を

「・・ステイル」
「・・・解ってる」
促されたステイルが、ゆっくりとインデックスに歩み寄り、その手を彼女の頭にかざす。
ポゥッと零れ出した光は、どこか、寂しさを思わせる様な灰色で。

――――もしも君が、何もかも忘れてしまったとしても
――――せめて僕だけは、何一つ忘れずにいよう
――――願った平穏も、抱いていた理想も
――――君が僕に、教えてくれたことも

――――――だから

「安心して、眠ってくれ。インデックス」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「・・・クソッ！！」

苛立ちのままに、近場にあった電柱に、拳を叩き付けた。途端、右手に痺れる様な痛みが走る。

「・・・・しっかりしろよ、上条当麻っ！！」

この上なく、俺は焦っていた。

インデックスに定められたタイムリミット。何より、あの魔術師は今夜零時に、インデックスの記憶を消すと言った。

俺一人じゃ、今の状況は到底覆せない。

「考えろ・・考えるんだ・・・」

インデックスは記憶し続けることで頭がパンクしちまう。

だったら、記憶を止めて眠らせでもすれば、時間稼ぎにならないだろうか？

「あんま悩んでる時間は無いんだよな・・・」

駄目だ・・・一人で考えても息詰まる。

誰か、脳医学か精神関係で解る人間がいないと・・・・。

「そうだ・・・あいつなら！！」

迷ってる暇はない。急いで連絡を

「って、携帯壊れたんだった・・・・」

俺は辺りを見回して、公衆電話を見つけた。幸い、レイから借りてた分の小銭があった。

硬貨を入れて、番号を押していく。

もしもし？――――

「レイ、俺だ」

当麻？そうか、起きたのか・・・ったく、要らん心配掛けやがって――――

「悪い、説教はあとでたっぷり聴くから。今直ぐ話したい事がある」

・・・今どこに居るんだ？――――

「時間が無いんだ。頼む」

・・・どうせなら直接聞く――――

「おう」

後ろから声がして、俺は振り返る。

「・・・・レイ」

そこには、出かけるときにいつも着ていた黒革のツナギ姿のレイが、携帯を耳に当てながら、片手を上げていて。

その姿に、俺は奇妙な安心感を覚えていた。

それから俺は、あの魔術師たちから聞いた事を、一字一句間違えず説明した。あいつらの目的も、それを行う理由も、インデックス

の記憶の時間制限も。
俺の説明を聞いてるレイは、頷いたり、相槌を打ったりすることもなく。終始無言だった。
「・・・って訳なんだが・・・レイ・・？」
「・・・」
おかしい。レイは手を組んでずっと俯いたままだ。まさかレイに限って寝てたなんてオチは無いよな・・？
「レイ？聞いて・・・っ！？」
思わず顔を覗いて、俺は絶句した。
苛立ちを押さえる際に唇を強く噛み過ぎたんだろう、口元からは血が垂れていた。よく見れば、組んでいた手からも血が滴り落ちている。
レイはブチキレてたんだ。それも半端じゃない位。
４年ぐらいの付き合いになるけど、ここまで怒ったレイなんて見た事が無かった。
「・・・行くぞ、当麻」
「って！おいレイ！！行くって・・」
「決まってんだろ。インデックスの所にだ」
レイはそう言いながら、近場に止めてたバイクから、俺にヘルメ

ットを投げて寄越す。

「だ、だってまだ、何も解決してないだろ！？」

「お前、まさかあいつらの言う事全部本気にしたんじゃないだろうな？」

それってもしかして、あいつらが嘘をついてるかも知れないってことか？

そう悩んでいる俺を見て、レイは呆れたように溜息をついた。

「な・・・何だよ・・？」

「・・・多分、お前今度の記録術（かいはつ）も落第だ」

ハァ！？なんで今記録術（そっち）の話になるんだ？しかも落第って・・・・・。

「とにかく戻るぞ。零時までそうそう時間もない・・・どういう事かは走りながら説明してやる」

「・・・解った」

とりあえず納得して、俺はバイクの後ろに跨った。

レイがハンドルを捻ると、エンジンがかかり、独特な音と共に、足元のマフラーからガスが吐き出される。

ヘルメットをかぶった俺は、振り落とされないように、ハンドルを握るレイの腹に手をまわした。

「ざけんなよ、クソが」

レイが何かを呟いたみたいだけど、エンジンの音で俺には聞こえなかった。

陸話目（後書き）

・・・はい、いかがだったでしょうか？

バトル的な展開とかは次回になります。と言うか予定してる魔術師編は次回も含めて２話分。

やっとこさ佳境に入り始めました。

それでは次回もお楽しみに。

ではでは～♪

漆話目（前書き）

はい、どうも白眉です。
最近投降したやつで長くなると言ったな。あれは嘘だ。
・・・はい、失礼しました。
本当は今回の7話で第1部を書ききろうと思ってたんですが、切りの良い所で区切りたいと思ったのとモチベーションが続きそうにないと思ったので前後編的扱いで区切りました。
だらだらと言い訳失礼します。

では、どうぞ～

漆話目

「クロウリー（ムーンチャイルド）の書を参照」

リビングに、人影が３つ。
一人は長身に赤髪の青年――ステイル＝マグヌスと、もう一人は長髪の女――神裂火織。
そして、その二人に間の位置に横たわるのは、苦しげにな表情で眠る修道女――インデックス。

「天使の捕縛法を応用し、妖精の召喚・捕獲・使役の連鎖を作る」

ステイルの言葉に呼応するように、インデックスを中心にして彼らの足元に広がる幾何学的な紋様。魔方陣と呼ばれるそれは、決められた効果を発揮する為に、淡い光を線に沿って隅々まで走らせていく。

「手伝え神裂。この子の記憶、殺し尽くすぞ」

そう。今起動させた魔術は、今もインデックスの頭を蝕む記憶を、消去する為の物。
完全記憶能力を有する彼女は、その容量の大半を１０万３０００冊の魔導書に割り振っている。故に、“忘れる”ことが出来ない彼女は、放っておけば溢れ返る記憶に脳を押し潰され死に至る。
それを防ぐ為に、こうして彼女の魔導書以外の記憶を消す。今までそうすることで、彼女はどうにか生き長らえてきた。

今回も、それと同じだ。

「・・・・・・」

「・・・神裂？」

しかし、サポートを促した筈の神裂は、手伝う素振りを見せない。どころか、まるで自分は動くべきではないと言った風に、傍観を決め込んでいた。

「神裂っ！！」

「約束の零時には、まだ時間がある様ですが？」

「・・・・・」

零時。それはインデックスの脳に設けられたリミットであり、同時に、一時的とはいえ彼女を“保護”していた少年との間に設けた刻限でもあった。

「――魔術師以外の人間が関わってきたのは、イレギュラーだったかもしれない」

でも。

「それでも――――辿る結末は同じだよ」

ステイルは自分の吐いた言葉に、既視感（デジャヴュ）めいたものを感じた。いつだったか、似た様な事を彼女に言った気がする。

そうだ。やる事なんて変わらない。変えられない。

「いつもの時間に、いつもの儀式を終えて。白紙に戻ったインデックスを、教会本部に連れ還る」

「ただ、それだけだ」

数瞬、訪れた沈黙。
ステイルは神裂を一瞥すると、再び術式を組み上げるべく、思考を切り替える。

バァァァァンッ

唐突に、音が響いた。

当然ながら、ステイルと神裂の視線は音源の方向へ。豪快な音と共にドアをブチ開けのは、対照的な色彩。
無駄な装飾の無い漆黒の革ツナギ――所謂ライダースーツとやらを纏った、長身細身の体躯。
何より目を引くのは、衣服とは真反対な、三つ編みに結えられたプラチナブロンドの髪。胸元辺りまで掛かった下げ髪は、着てる服も相まって、より一層見栄えがあった。
ただ、その表情はお世辞にも見栄えのする物では無かった。
眉根を寄せた、不愉快さを露わにした顔。切れ長な碧眼が、あか

らさまに威圧感を放つ。贔屓目に見ても、不機嫌なのが明らかだった。
彼――レインは、部屋の中心に居たステイル達を見ると、一瞬苦虫を噛み潰した様な表情になり、そのまま3人の方へ大股で前進する。

「何の用だ！まだ邪魔した――――」

憤慨を込めたステイルの罵倒の言葉は、唐突に途切れる。
一瞬、閃光弾でも浴びせられたかのように視界が明滅し、次の瞬間には天井と床が反転し。

（は・・・？）

数秒遅れて顔に走った鈍痛と、受け身も取れずに数度床上を転がり回った所で、ステイルは漸く、自分が彼に殴り飛ばされたのだと理解した。

「なっ・・・・」

神裂は、目の前で起きた事が理解できずにいた。止める間もなく振り抜かれたレインの拳は、寸分違わず友人の頬を捉え、魔術も無しに人を飛ばすという偉業を成し遂げた。

「お、おいレイ！？何だ今の音・・・」

「上条・・・当麻・・？」

遅れてやってきた上条当麻も、部屋の中の状況を見て混乱するばかりだった。

「・・・・おい」

そんな中、二人に背を向けたままのレインが、声を発した。この場に居合わせてから初めて発した声は、低く、感情を感じさせない、彩の無い声音。

神裂は自然と、場の空気が凍った様に感じる。隣に居た当麻も同様に、普段は見ない友人の姿に、動揺を隠せずにいた。

「お前ら、もう邪魔だから帰れ」

淡々と、何も無かったかのように告げるレイン。

「・・・何を・・・言って・・・？」

当然、神裂は反論しようとした。赤の他人にいきなり乱入され、あまつさえ『帰れ』などと。

それは余りにも横暴だ。身勝手が過ぎる。第一、彼はインデックスの状態を理解して、ここに来てるんじゃないのか？上条当麻は、一体彼に何と言ったのか？

邪魔された事に対する憤慨は、しかし彼の発する、有無を言わせぬ威圧感によって遮られる。呂律も、上手く回らない。

「・・随分・・・勝手だな・・」

「ステイル！！」

部屋の隅まで殴り飛ばされていたステイルが、壁伝いに立ち上がる。口端から垂れた血を乱暴に拭うと、敵意を剥き出しにしてレインを睨むステイル。

「意外だな。あんたモヤシだから、あのまま気絶でもしたのかと思ったぜ」

「誰がモヤシだ。どういうつもりだ？いきなり乱入して、邪魔なのはそっちの方だろう？」

レインの挑発じみた台詞に、ステイルは努めて冷静に返した。ただ、それは表面上の話だ。付き合いの長い神裂にも、付き合いの短い当麻にも、それは伝わっていた。現に、今のステイルからは殺気混じりに怒気が滲み出ている。それこそ、今すぐにでもレインを焼き殺しそうな、そんな激情を露わにしていた。

しかし、そんなステイルの怒りなど知った事ではないと言うかのように、レインは答えた。

「聞こえなかったのか？お前らはもう用済みだっつったんだよ」

「っ！！！」

「レイっ！！」「ステイルっ！！」

一瞬の出来事だった。

当麻がレインの名を呼ぶよりも、神裂がステイルを止めに掛かるよりも早く、ステイルが魔術を行使する。

『魔女狩りの王（イノケンティウス）』――――――

本来、何節かの詠唱を経て召喚すべきそれを、ステイルは一説も

口にする事無く呼び起こした。
乱暴な方法を持って顕現した、触れたもの全てを灰に還す紅蓮の魔神は、まさに、彼の怒りその物だった。数千度にも及ぶ拳――――否、破壊と消滅を宿した熱の塊が、目の前の少年へ振り下ろされる。

ステイルは知っていた。この行動が、何の意味も無い事を。この程度では、この生意気な少年を殺すには至らないだろうと。
だが、そうせずには居られなかった。
赤の他人に、彼女達と自分の輪の中に、土足で踏み込まれた。何より、今までインデックスを救うこと――生かす事に従事してきた自分を、あろうことか用済みだと言ったのだ。
許せない。許しがたい侮辱だ。
友人にすら久しく見せてなかった感情を。数年の間、心の底に抑え込んでいた感覚を。ステイル＝マグヌスは目の前の少年に向けて全てブチ撒けた。

一瞬の出来事は、しかしこれと言った変化を齎す事は無く。
鼓膜を破るような爆発音も、全てを砕く爆風も、全てを溶かす爆熱も、一切起きなかった。
その光景を、予測できなかったのは一人だけ。

「レ・・・・イ・・？」

当麻は、自分の目を疑った。
瞬間的にステイルが発動したのは、彼も苦戦した焔の魔神イノケンティウス。真っ向からでは幻想殺しでも対処しきれなかったその魔術の脅威は、一度対峙しただけによく知っている。
消した端から復活するその焔は、命などいとも容易く焼き殺す程だ。自分の友人――レインはただの一般人。自分と同じ無能力者（レベル0）。立ち向かうどころか消し炭にされてしまう筈だ。

だが、現実は違った。振り下ろされる殺意の塊を、しかし彼は臆することも無く。動じず、ただ、受け止めるように右手を突き出しただけだ。たったそれだけ。

なのに、イノケンティウスの拳は、彼にあっさりと受け止められてしまった。拳を受け止めた時とかに聞こえる、あの風船が割れるような音も無いことが、余計に奇怪さを際立たせた。

受け止めていた拳を、レインが握りつぶす。それだけで、イノケンティウスは霞のように霧散してしまった。

なんとも、奇妙な光景であった。

「・・様に・・貴様に何が解るっ！！」

不意に響いたのは、ステイルの怒声。

「僕らが一体！どれだけの思いで此処に居るのか！僕が一体！！どれほどの想いでこんな決断をしてるのかっ！！貴様に解るか！？

彼女は僕の親友で、大切な人だっ！その彼女の記憶を消さなければ、彼女は死んでしまうっ！！この苦しみが！葛藤が！！悔しさが！！！貴様は理解できるとでも言うつもりか！？」

抑え込んできた筈の感情は、一度箍が外れてしまえば、存外呆気無く。

喚き散らす様なステイルの声が、３人の耳に入る。それは最早、怒りと言うよりは、癇癪を起した子供の様な様だった。

そんな彼から罵倒を浴びせられて尚、レインの顔は無表情そのものだった。つまらない、取るに足らないものでも見るかのような彼の視線が、一層ステイルの怒りを煽る。

「何だ・・・何なんだその眼は！？何とか言ったらどうなんだっ！！」

「・・・下らねぇな・・」

「何だと・・・？」

「下らねぇつったんだよ」

呆れ返った様な声で、レインは冷めきった碧眼で何処までも冷たく告げる。

周りに居た当麻や神裂はもちろん、直接目にしたステイルは、あたかも蛇に睨まれた蛙の様な感覚を味わった。

まさに見る者を凍て付かせる様な、生きた心地のしない視線に、ステイルはさっきまでの感情の昂りが嘘の様に消えていくのを感じた。

「インデックスの為？笑わせるなよ。お前らがやった事は何だ？インデックスに怪我させて、追い詰めて、勝手に記憶を消してるだけだろう？ソレの一体どこが、インデックスの為だって言うんだ？」

「待ってください」

責める様な口調だったレインの首に、冷たい感触が添えられる。

視線を後ろにやれば、神裂が納刀した大太刀を向けながら、射す様な眼でレインを睨んでいた。

「それ以上は聞き捨てなりません。一体何様のつもりですか？貴方は。いきなり乗り込んできて、私達の邪魔をして。挙句、知った風な口で説教まで初めて。貴方に、一体私達の何が解ると言うんです

か！！」

「じゃあ聞くが」

レインが、振り返る。

「お前達は、インデックスの何を知ってる？インデックスがどんな思いでいたのか、お前等に解るのか？記憶を消されて、自分が何なのか、何者なのかも解らないまま、彷徨い、追われ、逃げ惑うインデックスの恐怖が、お前等には理解できてるのか？」

「そ、それは・・・ですが！記憶を消さなければ、インデックスの命が！！」

「聞いたよ、当麻から。１０万３０００冊の魔導書のせいで、脳がパンクするんだってな」

「だったら「有り得ないからだよ」！？」

「有り得ないんだよ、そんな事は。高々１０万とちょっと程度の本を記憶しても、人間は死なない。例え、どんな事でも「忘れる」事が出来ない奴でもな。そう言う風に出来てるんだよ、人間は」

人間の脳髄とは、本来１４０年分もの情報が記憶できる。

そもそも、記憶とは１種類ではない。言葉や知識を司る意味記憶。運動や動作の慣れを司る手続記憶。日常の出来事の様な、思い出を司るエピソード記憶。それらがお互いの管轄する記憶を管理することで、人間の脳は成り立っている。

ゴミの分別の様に、容れ物からして違うのだ。魔導書の情報が、エピソードとして記憶される事は無い。ましてや思い出を削らなければならないなど、絶対に有り得ない。

「「・・・・・・」」

告げられた真実に、ステイルも神崎も絶句した。

無理もない。信じていた者には裏切られ、その上自分たちのやってきた事が、全くの無駄だった処か、大切な友人を傷つけ、記憶を奪っているだけだったのだから。

「・・・なぁ」

レインがゆっくりと、ステイルに近づいた。

「お前は、あいつの友人なんだろ？あいつが、大切なんだろ？だったら・・・だったらどうして！どうして！！あいつを助けてやらない！！」

固まっていたステイルの襟首を掴み上げ、レインは叫ぶ。

「あいつを守るって誓ったんなら、何してでも守り通せよ！！あいつを助けるって誓ったんなら、下らないもんに縋りついてないで、あいつを助けろよっ！！」

「っ・・・」

「科学は信用できない？魔術と科学は相容れない？馬鹿なこと言ってんじゃねぇよっ！！人の命が掛かってんだぞっ！！！」

怒り。
彼の叫びは、純粋に、ステイルと神裂に向けられたものだった。
「どうして助けてやらなかった！？どうして手を差し伸べてやらなかった！？
仲間だったんだろ？大切な奴なんだろ？だったら、お前の背負ってるもん全部捨ててでも！！あいつを助ける事を選ぶべきなんじゃないのか！？」
非難の声は、深々と突き刺さる。
既に、神裂もステイルも、ボロボロだった。
「お前等は、あいつ――インデックスと魔術を天秤に掛けたんだ。それで結局、お前等は魔術を選んだ。その程度だったんだよ、お前等の想いは」
「誰かを守るってのは、誰かを助けるって事は。そいつの命を、人生を背負うってことだ。そんな覚悟も無い連中に、誰かを助けるなんてできねぇよ」
ひとしきり、吐き捨てるように捲し立てて。
レインが掴んでいた手を放すと、ステイルが崩れるように座り込んだ。
ガックリと、力無く項垂れている。顔も真白で、まるで抜け殻の様になっていた。

「――――おい」

重苦しい沈黙が、レインが神裂に声を掛ける事で破られる。
当の神裂はと言えば、声を掛けられるとビクリと肩を震わせ、レインの方を見る。ただ、視線は揺らぎ、動揺しているのが見て取れた。

「邪魔だから、こいつ連れてとっとと出て行ってくれ」

「で、ですが・・・・」

「あんた等が居ても、足手纏いになるだけだ」

「っ・・・解りました」

まともに反論もできないまま、神裂はステイルに肩を貸しつつ、部屋を出て行った。
やはり、最後まで納得はできないまま。

「・・・なぁ」

「・・・何だ」

今まで沈黙を保っていた当麻が、レインに話しかける。

「本当に・・これで良かったのか？」

「・・・・」

珍しく叫び声まで上げていた友人に気圧されて、口を挟む事も出来なかったが。

それでも、彼等の――――ステイル＝マグヌスと神裂火織の、インデックスを想う気持ちは本物だった。

当麻はそう思ったからこそ、レインに問い掛ける。本当に、これで良かったのだろうかと。

「――――さぁな」

対してレインは、悔いる風でも、おどけた風でも無く。

「何が良かったかなんて、俺には解らねぇよ」

ただ淡々と、そう口にした。

「解らないって――――」

「どの道、あいつらを退けなきゃ、インデックスはこれからも記憶を消され続けてたんだ。お前はそれが許せなかったから、こいつを助ける事を選んだんだろ？」

「・・・・」

「本当に正しい事なんか無いさ。ソレは全部、“人”が勝手に決めた事だ。自分の意志を通すなら、必ず何処かで、誰かの意志を踏み倒さなきゃならない」

「・・・・・・」

何かが引っ掛かる様な。そんな感覚だった。
理解はできるが、納得はできない。理屈は呑みこめても、受け入れる事は出来ない。そんな、奇妙な感覚。

ボフッ

「のわっ！？な、何だよいきなり！？」

突然、当麻の髪をクシャクシャと掻き回すレイン。

「良いと思うぜ」

「な、何が？」

「正しい事なんざ何処にも無いが、お前みたいな考えの奴が一人ぐらい居る方が、世の中は丁度良いさ」

と、やはり彼にしては珍しく。優しく微笑みながら、レインは言った。

「・・・よく解らねぇよ」

「別にいいさ、解らなくても。その方がよっぽど幸せだ。さ、とっととインデックスを助けるぞ。１２時までそうそう無い」

改めて、二人はインデックスの傍へ。
寝かせられているインデックスの顔色は蒼白で、顔には蚯蚓腫れの様な物まで浮かび、呼吸も荒い。今の彼女がどれだけ苦しい思いをしてるのか、額に滲む脂汗が物語る。

ふと、近くに居る気配が変わった事に気付いたのか。インデックスが薄らと目を開けた。

「インデックス！」

当麻がインデックスに呼び掛ける。インデックスはボンヤリとした視界の中、傍に居るのが自分を助けると言ってくれた少年二人だと気付くと、安心したのか、柔らかく微笑んだ。

「当麻」

「・・あぁ」

『もし、“ソレ”が有るとしたら。多分頭に近い場所だろう。人目に触れず、傍目からは解らず、インデックス本人も気付かない様な――――』

ここに駆け付ける途中に、レインから聞いた「仮説」。しかし、自分が最も信頼する友人が言うのだから、それはほぼ真実に相違無いだろう。

当麻はゆっくりと、インデックスの顔に手を近付け。

口を、開いた。

「――――あ」

有った――――。当麻とレインは確かに視た。インデックスの口の

奥、喉に刻まれていた『文字』を。
古代文字めいた、何らかの意味を持つだろう不可思議な記号。何より、視ただけで感じ取れるような“何か”を、二人は感じ取った。

「――――はは」

響く、渇き気味な笑い声。しかし声を出した本人の顔には、諦めや絶望と言った感情は無い。むしろ、その逆だ。

「考えてみりゃ、使い方一つで“世界を捻じ曲げる”なんて危険な１０万３０００冊の魔導書だ。野放しにされる理由なんて無かったんだ」

一つだけでも強力な力を魔導書が、１０万３０００冊も有るのだ。それは当然、驚異の対象であり、対魔術師を掲げる『必要悪の教会』にしてみれば、その存在それだけで牽制の意味にもなるだろう。
だがもしも。１０万３０００冊もの魔導書の、知識を知る存在が。叡智の結晶とも言える存在が、『教会』に反旗を翻したとしたらどうなるだろうか？或いは、それだけの“力”を持った存在が、自分たち以外の者の手に渡ったとしたら？
故に、『教会』はインデックスをに対する抑止力が、繋ぎ止めておくための鎖が必要だった。それが、インデックスに施された魔術であり、インデックスにとっては親友だった魔術師二人だ。

「我慢してくれよな、インデックス」

当麻が右手をインデックスの口の中に入れる。

「・・・ぐっ・・」

指先が、喉の刻印に触れる。その瞬間―――

ビキッ

「・・ぎっ・・・ガァッ！」

「「っ！？」」

罅割れの様な音が響いたかと思うと、次の瞬間傍に居た二人はいきなり吹き飛ばされた。何か見えない力に拒絶されたかのように強制的に引き剥がされる。

「痛っ・・・！」

「い、一体何が・・・？」

『警告』

聴こえたのは、何時か聞いたあの機械じみた無表情な声。だが、この前と違うのは、明らかな敵意を孕んでいると言う事。

「い、インデックス・・・！？」

「なるほど・・・『教会』ってのは、随分えげつない事する連中らしいな・・・！！」

当麻とレインは、先程まで自分達が居た場所を見て戦慄した。

そこに居るのは、苦しそうに横たわっていた筈のインデックス。

ただ、今の彼女には元来のあどけなさなど欠片も無く。

『Ｉｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ――禁書目録の『首輪』。第一から第三までの全結界貫通を確認』

そこに居るのは、無慈悲に、冷徹に、冷酷に。ただ外敵を排除するためのプログラム。

纏う空気は、最早全くの別物。

『１０万３０００冊の『書庫』保護のため』

世界を捻じ曲げる、“力”そのものだ。

『侵入者の迎撃を優先します』

夜は長く、未だ明ける事は無い――――

漆話目（後書き）

・・・はい、いかがだったでしょうか？
今回のお話は長いようで短く、進んでいるようで進んでないと言う相変わらずな感じです。
レイをキレさせる所は一番力を入れただけにこんな感じで良かったのかといまだに悩む部分でした。
ステイルファンや神裂ファンの方々には大変申し訳ありませんでした。
ただね、本気でインデックスを救ってやるつもりならやっぱり魔術以外にも頼るべきだったんじゃないかなと私は思いまして・・・・
まぁそんな簡単にはいかないのが人間という生き物なんですが。

次回、魔術師編堂々完結（嘘じゃない。嘘じゃないよ）っ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7875q/

とある重力の星殺し《スタースレイヤー》

2011年12月20日01時52分発行